新選笑話集

211
865

宮内省圖書寮藏

笑話集

明治
38 6 26
内交

特13
321

はしがき

今は世に稀なる『開口新語』中の幾分を抄譯し、更に在來の滑稽書を參考として、自作の分を加へたるもの、聽てこの一篇とはなりぬ。

抄譯の分には、從來多少耳馴れたる話、稍理屈がゝりし事の二三は無きにあらねど、捨て難きは取りつ。自作の分には、大家の警句を潤色したるもあり、多く有觸れたる事實を材料としたるもあれば、其言種たるや、驚の首長きもあらむ、矮鶏の脚短きもあらむ。

さらば敢て、臍の宿替をば强へじ、又敢て顧を解んの謀叛は有たじ。たゞ夫れ、竈馬の髭ながき夜は更なり、

蚊の嘴のみじか夜の、　お伽ともならば望足る。

二

卅八年五月中旬

氣の知れぬ麻布區もみぢ屋敷に於て

蛙の聲を聞きつゝ

松濤しるす

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

新選笑話集 目次

其一　千手觀音……一
其二　借金……二
其三　毒草……四
其四　眼科醫……六
其五　久米の仙人……八
其六　律義者……九
其七　柔術の稽古……一一
其八　一擧兩得……一二
其九　紙鳶醫者……一三

其十　圍碁……一五
其十一　蟹と海參……一六
其十二　火事……一七
其十三　盜賊……一七
其十四　深い川……一八
其十五　グル〳〵坊子……一九
其十六　無學と文盲……二〇
其十七　賣ト先生……二三
其十八　父子の酒飲……二三
其十九　美人と侍女……二四
其二十　足の所在……二四

其廿一　焙盆賣……二五
其廿二　ぼんやり……二五
其廿三　十萬億土……二八
其廿四　乞食……二九
其廿五　按摩……三〇
其廿六　主人の顏……三一
其廿七　おき忘れ……三二
其廿八　山茶花と水仙……三三
其廿九　放屁（其一）……三四
其三十　放屁（其二）……三五
其卅一　三日前なら……三六

其卅二　旦那の影……三七
其卅三　大剿……三七
其卅四　ハイれ替り……三九
其卅五　鼻療治……四〇
其卅六　値踏み……四一
其卅七　食過き……四二
其卅八　貸家……四二
其卅九　癡者……四三
其四十　夫婦喧嘩……四四
其四十一　試合……四六
其四十二　橋の穴……四七
其四十三　理髪床……四八
其四十四　三年阪……五〇
其四十五　狐（其一）……五二
其四十六　狐（其二）……五五
其四十七　狐（其三）……五八
其四十八　狐（其四）……六〇
其四十九　貧……六二
其五十　名刀……六四
其五十一　妙薬……六八
其五十二　茶漬……七〇
其五十三　井戸の水……七一

其五十四　牡丹……七二
其五十五　白眼競……七五
其五十六　玉手箱……七六
其五十七　瓜尖の火……七九
其五十八　ハイカラ……八〇
其五十九　流行謠……八一
其六十　賽錢……八二
其六十一　聾者……八三
其六十二　貧乏神……八四
其六十三　昔氣質……八五
其六十四　大黑天……八七
其六十五　新亡者……八八
其六十六　嫉妬……八九
其六十七　兩換……九〇
其六十八　魔窟……九一
其六十九　雀を捕る法……九三
其七十　大釜……九四
其七十一　書家……九六
其七十二　畫家……九六
其七十三　馬と牛……九七
其七十四　釣好き……九八
其七十五　達磨……九九

其七十六　火の用心……一〇〇
其七十七　化物退治……一〇一
其七十八　甲冑姿……一〇三
其七十九　富者……一〇四
其八十　鷹……一〇五
其八十一　鷄軍の一鶴……一〇六
其八十二　同衾……一〇八
其八十三　一と目……一一〇
其八十四　放蕩者……一一二
其八十五　大根……一一三
其八十六　燈油注……一一四

其八十七　用意周到……一一五
其八十八　忠臣……一一六
其八十九　下を御覽……一一八
其九十　鐘聲の數……一一九
其九十一　夜明け……一二〇
其九十二　章魚藥師……一二二
其九十三　母の恩……一二三
其九十四　彌勒の味……一二四
其九十五　一發千矢……一二五
其九十六　盜術の演習……一二六
其九十七　蓮根……一二九

其九十八　小言……一三〇
其九十九　狸の腹鼓……一三一
其百　馬の目……一三二
其百一　水桶……一三三
其百二　章魚と海鰻……一三五
其百三　下戸と上戸……一三六
其百四　魚賣……一三八
其百五　電話……一三九
其百六　投身……一四二

新選笑話集

其一　千手觀音

有本松濤著

或時、種々の名ある佛や菩薩が、毘盧殿に會議を開きました。其中に、唯一人千手觀音が、病氣のため、欠席するといふ屆があつた。處が、何せ大達者の千手觀音が、病氣だといふのだから、議長の大佛は、大に心配をして、早速、藥師に命じて、病氣診察に往かしめた。藥師は命を奉じて、千手觀音の處へ出かけたが、會議の了る頃になつても、未だ還つて來ない。其中に日が暮れて、大佛が切に氣を揉みながら、腹を立て居る處に、漸との事で還つて來たから、大

佛は、『何故、汝は其麽に還が遅いのだ。』と腹立紛れに叱ると、藥師は、一向平氣で、『何故ッて、貴下、診察をして居りましたもの』『そりや診察に往つたのだから、それは宜しいが、那麽近い處に、僅た一人の病氣を診るのに、朝から晩までかゝるといふ事があるものか。』と益す叱る程、藥師は愈よ平氣で、『そりや貴下、貴下からの命令ですから、一層叮寧に診察しなければなりませぬ。それは宜しとしても、何と云つても、貴下、千本の手の脈を診のですから、容易の事ぢやありませぬ。』

其二　借金

ある人が金を借りて、期限が來ても還さない處から、債主が腹を立てゝ、催促に出掛けても、毎もく、今日は明日はと斷つて、一向埒が明かないので、一日債主は、催促も今日を限りと嚴談に及んで、『人の爲に救かつて居ながら、今となつて此不仕儀は何事だ。餘り人を馬鹿にする。』と面責した所が、借主は、『否や、決して打捨て置く譯ではないのて、疾から三ッの返濟方法を設けて、其中て何とかしやうと思ふのてすが、未だ其運びに往かないのて……』と言も畢らぬ中に、債主は、『其三ッの方法とは！』と尋ねると、『實は、其方法てのは、一ッは私が諸處方々を歩行廻る中に、何處かて金を拾へば、それてれ拂ひするといふのて。それから次の一ッは、貴下に差上てある借用證書を、貴下が遺失すのを待て、私が拾はうと思ふのて。まア後一二年も待て頂けば、其中には……ね。』と云のを聞い

て、債主は烈火の如く憤つた。けれども、尙殘りの一策があるからもしやと、それを尋ねると、『否や、これは容易に言ふことは能ません。』と斷る。『それでも是非言ひなさい。』と逼るので、借主は、『其麼ら申しますが、實は其三ッ目の策といふのは、人の身體は元々、金でも石でもないのですから、貴下にも一度は死ぬ時が來ましやうから、可成は早く……と、其時を待つて居るのです。』

其三　毒草

ある男、野原を通りかゝると、路傍に、蛇が蛙を呑むで居た。默つて靜に見て居ると、忽ちの中に、悉皆呑込んで了つたが、蛇の腹が驚くほど太く脹て、蟠蜒と叢の中に這て行つて、小さな或

草を、其蛇が舐めると見えたが、今まで脹れて居た腹が、見る〳〵故の樣に細つて了つた。男は、『この草は、大方腹を減らす藥草だらう。』と早合點し、『よし〳〵、此草を取て往て、友人を驚かしてやらう。』と、乃て、其草を四五莖取つて、我家に歸りましたが、翌日友人に、俺は何でも汝の云通り、物を食て見せる。』と飛てもない自慢をした處が、其麼ら、此處に餅があるから、之を五十だけ食べてみせたら、褒美を出す。』と、云はれたので、『其麼事なら、朝飯前だ。』と、片端から喰べ始めたが、限りある身體に、さうは仲々喰べきれないのを、無理々々口へ押込んで、終には腹は裂けさうだし、苦しくはなるし、今にも死さうになつたから、此處ぞと、例の草を袂から出して、密と口に入れたが、すると問も無く、自分の身體が、自

然に肉は銷れ、水が流れ、見る〳〵、跡方もなく溶けて了つて、傍に見て居た友人の前に、衣類ばかりが殘りましたとさ。

其四　眼科醫

名高い眼醫者がありました。或患者の眼を診て『こりや片々の眼玉を、抉り出して、掃除をしなければならぬ。』と申しますから、患者は『癒ります事なら、如何樣の治療でも、辛抱致します。』と云つて、愈よ療治に取掛つた處が、醫師は忽ち、片方の眼玉を抉り出して、それを藥で洗ひ、天日に曝してゐくと、隙間に蠅が飛て來て、其眼玉を、攫つて何處へか往て了つた。醫者先生大に愕き周章たけれど、何とも致し方がない。と云つて、患者にそれと知らす譯にも

ゆかず、困りきつた末に、漸く一計を案じ出して、狗の眼玉を抉り取つて、そして之を患者の眼と伴り、その儘元の眼の穴に入れて、療治を了りました。處が、日ならずして、患者は病が癒つたと云て、大喜び、一日其醫者先生の處へ、お禮にまゐりました。醫者先生、自分の落度を悟られずに、加之も禮に來たと云のて、内心大安心、ホツト息を吐いた。が、自分ながら、不思議に思つて、それとなく『それはまア可い塩梅でした、何と例もの時と異つた處はありませぬか？』と問ねて見た。すると、其男の答へるには、『ハイ、別に大した事はございませぬが、唯厠へゆきますと、右の眼では、穢い物を見るも嫌てすが、左の眼で見ると、何だか、それを舐たい氣が起ります。』

其五　久米の仙人

麗かに晴渡つた天氣ながら、風か割合に強い日、ある婦人が盛裝つて、下女をつれて散歩に出かけました。驟て、但ある橋にかゝると、其處は前後野原なので、風を遮ぎるものなきまゝ、なか〳〵風が激しくあたつて、飄々と、幾度となく婦人の裳を颺げ、雪の樣な白き脛を見せる。恰度其時、何處からか、絲を切つて風鳶が飛て來て、婦女の傍に墮ちた。て、隨て居た下女が驚いて、『オヤ何うしたのだらう。』と叫ぶと、婦人は、さも誇り顏に、『何有、此りやア、久米の仙人の尸解だよ。』

其六　律義者

當世の若者に似ず、至つて節儉い律義者がありました。金のかゝる夜遊び事などには、決して交際をせぬ所から、兎角仲間はづれとされては居るが、其代り、何時も安心して働いて居る事が能る。て、他の仲間が嫉み出して、何とかして一度彼奴を奇酷めてやらうてはないかと相談し、折柄春の事てはあるし、一日大勢揃つて、向島に花觀の催しのあつた時、所謂第二次會と酒落こみ、一同て何處かへ遊興に往て、年に一度の生命の洗濯をしやうてはないか、と云ふ事になつた。元より唯一人として、之に不贊成を稱へる者は無つたが、彼の若者だけは、『生命の洗濯は、今日の花觀て充分だから、俺はこ

れて失禮する。』と云つて歸りかけるので、目的の玉に逃られては大變と、一同寄て蒐つて、右や左と勸誘めるので、若者は、有繋に、『それでも！』とは言兼わて、止むなく一行に加はる事となつた。

さて道々、種々の話が出て、一人前何程づゝ遣はうかといふ評議。何が何程、何が何程と計算する者もあつて、先づ一人に付貳圓づゝ奮發ふてはないかと一決した。唯一人、件の若者は、一言も出さずに聞いて居たが、中ての發頭人らしいのが、『ねえ君、一人貳圓づゝ出し合ふと決めたが、それで可いだらうね。』と言つて、若者の顏を覗くと、若者は、『貳圓で何うするの？』と問ねる。『何うするッて君、貳圓で、充分飲むて食つて、騷いだ揚句、女を一晩相手にすゝのさ。』と云ふと、其男が、『そりやア滅法安いものだ。』と存外の挨拶に、一同、さては思ふ壺にはまつたと、內心喜んで居ると、續て又例の若者が、進んで云のを聞けば、『貳圓とは安いものだ、貳圓で夫丈の遊びが能るとは難有い。金は實に難有いものだ。……ぢやア俺は、其難有い金を持て歸つて、家で寢やう。』

其七　柔術の稽古

ある長屋へ、柔術の師匠が來て、道場を開いたので、ある家の小僧が、『何うか敎へて下さい。』と賴みに來ました。て、先生が面接て、『汝は、少しは下地があるのか？』と問ねるから、『下地ッて、別に何にも知りませぬが、喧嘩て横面頰投る位は知つて居ります。』と答へると、『それは何にもならぬ、ぢやア、最初から敎へるから、何て

も可い、俺にブツかつて來て試なさい。』と云つて、一手敎へた後、『これが露のあたりむそう反しといふものぢやが、それは表て、裏には斯云ふのがある。』と、又小僧を取て投げる。聽て小僧は、不審の眉を顰めて、『先生柔術にも、裏表があるのですか？』と問ねる。先生は、『ウム、裏表があるのぢや。』小僧、『では、先生、私は其裏の方だけ敎へて頂きたうございます。』と云ふから、『何故表は惡いのか？』と問反すと、小僧の曰く、『表は知つた人にあつた時面倒ですから。』

其八　一擧兩得

或村で、米を舂く新工夫を凝して居る者がありましたが、其家へ訪ねて來て、好い工夫を考へ出したと云つた者がある。『然らば、それは何うするのか？』と聞くと、『普通在來の如に、杵で舂くのだが、下にばかり臼を置かずに、上へも臼を倒に懸けて置くのさ。而して杵をモ一ツ、上向につければ、下にねろした時には、下の臼を舂き、上へあがつた時には、上の臼を舂くやうにすれば、是こそ一擧兩得と云ふものだ。』と、得意顏に話した。で、『成程、それは好い考へだが、上の臼へは、米を何うして入れたら可からう？』と問ねると、其男は少時眞面目に考へて居たが、『ハヽア成程、其處の點までは、未だ考へなかつた。』

其九　紙鳶醫者

これも醫者のれ話ですが、或年の夏、惡い疫風が大流行て、醫者は藪でも筍でも、目の廻るほど大繁昌、其中でも、近頃開業して、疫風にかけては天下一だと評判の醫者がありましたが、自分も得意になつて、毎日お抱俥で飛び廻り、名前を賣るのは此時とばかり、セッセと稼いで居る中に、『何でも、表外を歩くには、目印を拵へるのが一番だ。』と、妙な處へまで注意し、さて何うしやう、斯うしやうと、思案の末、車夫の被布につける定紋を、何か目に着く印にするが可からうと、乃て、其印を考へた。けれども好い思付がない。其處へ某人が來て、『それは紙鳶を書いて印にするが可からう。』と申しますから、『其義は……？』と問ねると、『紙鳶は、風が止めば、地に墜ちるからさハッハッハ。』

其十 圍碁

碁好きの人が、相對して、碁を圍んで居ると、傍に一人、視て居る者がありました。段々に、白と黑とを打ち打つて、今や、勝負のつき際、關ヶ原とも云ふべき、大切の場合になつたが、其時、白を有て居た方の人が、傍に視て居た者の横面に、突然碁石を、ヒシヤリと投げつけた。視て居た男は、大に怒つて『汝は、何の怨があつて、俺に石なぞを打付るのだ。』と詰ると『汝さんが、横合から口を出すと困るからさ。』と答へる。『でも俺は、今まで一度だッて、口を出した事は無いてはないか。』と再反問した處が、白の人答へて云ふには『汝さんが何にも口を出さない前だから、それて打付たのだ。

口を容れた後て、打付て見た處て、最う手後ぢやありませぬか。』

其十一　蟹と海參

或時、蟹と海參と口論を始めました。蟹が頻りに海參を嘲つて云には、『汝は、頭が尻か、尻が頭か、ちつとも分明らないてはないか。』と。すると海參は、何を云かとばかりの顏をして『れい、他人の事は言はれまいぜ。まア自分の態を見ろ。汝は右左の兩方に、剪や足を有て奔るから、往くのか還るのか、還るのか往くのか、さッぱり譯が分明らないてはないか。』と云つたので、蟹は何とも云へなかつたと申します。

其十二　火事

間抜な傭人がありました。或晩、風の烈しいのに、火事が起つて、方々から半鐘の音が聞えました。主人は驚いて眼をさまし、其傭人を起して、早速屋根へ上らせ、『火事は、西か東か。』と尋ねると、『否え。』と答へるから、『其麼ら、近いか遠いか。』と問くと、又『否え。』とばかり。主人は自裂たがッて、『何だ馬鹿め、何うして其麼事が曉らないのだ。』と叱ると、傭人は、洒亞々々として、『餘まり火の手が强いので、目が眩むてしまひます。何うか明日の朝まて待つて下さい、能く調べてれ報せしますから……。』

其十三　盜賊

ある日、盗賊仲間が、山中に宴會を開きました。酒肴を入れる器物は、勿論盗んで來たものばかりゆへ、なか〳〵貴重な物もあつたが、其中にも、黄金の盞が一箇あつて、それを交る〴〵、廻しては飲み、飲むては廻しつして居たが、嬉て、各自に酔も廻り、宴酣とも云ふべき頃になると、早くも、件の金盃が見えなくなつた。何れも四邊を探したが、遂に見當らないので、其中の頭領株とも云相なのが、腹を立てゝ、『何うも怪しからねえ。今まであつた盞が、何處に往くものか。多分、此社中のうちに、盗兒が居るのだらう。』

其十四　深い川

或人片田舎を旅行中、一流の川が在る所にさしかゝつた。見れば其川には橋が無い。何うして渉らうかしらと考へつゝ、フト向ふを視ると、自分より先に渉つて居るものがある。中流は可なり深いものと見えて、其人は胸の當りまで水に沒して居るから、自分も覚悟を極めて、裸體になり、さて怖る〴〵水中に入つて往つたが、中流まで往つても、其深さは膝まで位しか達しない。其中に向岸を視ると、先の人は渉り了つて居て、能く視ると、其人は蹲者てあつた。

其十五　グル〳〵坊子

或寺の生臭和尚、一夜妓楼に遊びに往つた處が、其敵娼に出た女が、和尚を嫌つて、佯り眠つて、知らぬ顔の半兵衛さん、落花有意流水無情ときめ込んだ。而して其中に、眞實に、鼻から提灯て熟睡

て了つた。振られた和尚は、火に癪に障つて堪らない。何か返報をして歸つて遣らうと、考へた末、剃刀を出して來て、女の綠髮を剃り落し、グル〳〵坊子にしておいて、竊と逃げて歸つて了つた。を聞も無く夜が明けて、女は目をさまし、見ると最う和尚の姿はない。乃て大に喜んで、起て顏を洗ひに往つたが、フト金盥の水を覗くと、グル〳〵坊子の顏が映つた。女は驚くまい事か、矢庭に叫んで曰く、

『和尚さん、未だ歸らないんですか？』

其十六　無學と文盲

眼に一丁字なき男、一日主人の手紙を持て、使に出かけたが、途中で其行先を忘れて了つた。何うして可いかと、思案最中、向ふから一人の口髭生やした男が遣つて來たから、渡りに船と喜んで、件の手紙を出して、懇に其上封を讀んでくれと賴むだ。所が、口髭先生、見かけによらず、自分も字を知らないから、それを讀む事が能ない。けれども此男に聞かれて、讀めぬと云のも剛腹だから、何とかして胡广化してやらうと、忽ち一計を案じ、『可しく〳〵、早速讀むてやらうが、併し汝は、此所に來るまで、他の人に讀むで貰つたか如何だ？』と尋ねると、男は、自分の耻を可成隱したつもりで、『ハイ、幾人にも讀むで貰ひましたが、能く讀んでくれた方は在りません。』と嘘を言つた。乃て口髭先生、得たりとし、眞面目になつて『最初に俺にさへ讀ませれば可かつたに、あまり皆なに見せて、讀み散されたものだから、惜い事に、此字は、今ぢや讀む事が能なく

なつて了つた。』

其十七　賣ト先生

八卦見を以て世渡る先生、一日路に迷つて、困つて居ると、一人の百姓に出會つたから、早速路を尋ねると、百姓は、なか〳〵皮肉な性質と見ゐて、『先生はト占者ではありませんか？』と問くから『左樣ぢや。』と答へると、『ト占者なら、自分で八卦をおいて占つたら可いてはありませぬか。自分で其を占う事が能ない位なら、人の身上なぞは判斷能やしまい。』と遠慮なくきめつけた。賣ト先生ウンと行詰つたが、稍あつて、沈着拂ひ、『イヤ、汝さう云ものぢやない、實は先刻八卦をれいた處が、易の表に、キツト百姓に會ふから、其百姓に問け、と出たのぢや。』

其十八　父子の酒飲

或處に父子の大酒家がありました。ある日例の通り、息子が何處てか飲んで、爛醉になつて歸つて來ると、是より先、父爺も泥醉になつて、臥て居ましたが、息子を見るといきなり、『此野郎奴ッ、毎日〳〵日々々酒ばかし飲やがッて。見ろ、汝の首は二ッになつてるぢやねゐか。未だ身體が六ッになつてねゐのが見着ものだ。其麼怖しい者には、此の家產を續がす事は出來ねえから、トットと何處へでも出て往つて了へ。』と吐鳴り立てた。すると、息子の言分が面白い『篤棒め、此麼グル〳〵回旋る家には、此方から居る事を御免蒙らァ。』

其十九　美人と侍女

今を盛りと咲誇る、花のやうに美くしい、或大家の別嬢が、侍女を一人つれて、路を歩いて居ると、行違ひに通り掛つた若い男が意味ありげな目で、睨んで行過ぎたが、稍あつて『素破らしい別嬢だな。』と云聲が耳に入つた。すると別嬢は、侍女に、『今往つた人は、私の事を何とか言つたの？。』と問ねる、侍女答へて曰く『否え、貴女の事ぢやないんですよ。』

其二十　足の所在

日脚長き夏の日の夕まぐれ、夫婦の旅人が或宿屋に着きました。

宿屋では、『さア御濯ぎなさいまし、』と庭に水盥を廻はす。夫婦は腰を卸して、草鞋の紐を解き、疲れた足を水に入れて、さて濯ぐ程に、夫が誤つて妻の足を洗ひ出した。妻は至て横着者と見え、默つて足を洗はせた後、竊かに足を引くと、夫はそれと氣着かず、急に足が見えなくなつたから、驚いて、『俺の片脚は何處へ往つて了つたらう？。』

其廿一　焙盆賣

『焙盆やア〳〵。』と賣歩く商人がありました。某家で、呼止めて價値を問くと、『これは至て堅固に、念入に作つてあります。』と先づ効能を演べたて、『エヽ値段は一個拾錢に願ひます。それよりか小

しもおまけは出來ませぬ。』と云ふ。けれども、『高いから五錢に負けろ。』と云つた所が、商人は斷然として、返辭もせずに往て了つた。

さて〳〵短氣な商人かなと、後て話し合つて居ると、聽て、向ふの家でも、焙盆屋を呼止めて、『一個參錢に負けろ。』とこぎつて居たが、今度は焙盆屋大に立腹して、見せた焙盆を引奪る樣にして、突然それを擔いて居た、籠の中に投げ入れた。何ぞ堪らん、焙盆は二ッに壞れて了つた。それを見て居た前の家では、『あゝ五錢でも買はなくて可かつた。』

其廿二　ぼんやり

『オイ小僧、拾錢のれ盆を一枚買て來い。』と命令つて、小僧は拾錢持て出掛て往つた。間もなく歸つて來て、一枚の盆を、主人に渡すと、主人の氣に入らない、『これは餘り小いから、モット大いのと取代て來い、』と云はれたので、小僧は『ハイ』と二ッ返辭て走つて往つた。不足の金も持たずに、何うして來るかと、主人が待つて居ると、小僧は大な盆を持て歸つて來て『ハイ取替へて參りました。』と差出すのを見ると、今度は氣に入つたから、『これは矢張拾錢か？』と問ねる。『否え貳拾錢です。』『では、不足の拾錢は何うした？』と再問ねると、小僧は、『盆屋へ往つて、前に拾錢遣つて、今又此拾錢の盆を返すのだから、都合貳拾錢、それで可いだらうと申しましたら、盆屋の爺が、宜しうございますと言つてました。アハヽハハ。』

其廿三　十萬億土

丹波國の某人、一日僧を詰つて『釋氏の言に、西方世界十萬億土といふが、それは、何地から十萬億里を隔てゝ居るのか？』と問ねた。僧も此問には、閉口したものと見ゐて、少時して『これは、我釋典の中にあることとて、特に秘授に屬して居る事ぢやから、苟くも斯道に入者でなければ、傳授することは能ない。』と答へた。すると相手も去る者、高く笑つて『いや、それは可けない、それやれ前さんの遁口上だらう。』と哈嘲すやうに云つた。僧愈よ窮したが、遂に忿然として、塵を拂つて答ふるには、『それ、十萬億土とは、丹波の龜山から。之を敎へて云ふのぢや。』

其廿四　乞食

大晦日の晩に、或橋の下に、陣取つて臥してる夫婦の乞食がありました。何せ世間は、今年も今宵を限りといふので、諸處方々の掛取が、橋の上を往來すること、絡繹として絶間がありませぬ。時刻は段々に迫つて、最も眞夜中になつても、未だ相變らずの人通り。すると、乞食の妻は、目を醒して、『まア何と云ふ八ヶ間しい事だらう。那して歩いて居るのは、皆な掛取りだが、幾ら金があつても、未だ休む事も出來ないのだ』と云ふ中に、何處やらの鷄が刻をつくつて鳴いたのを聞き、『おや、もう鷄が鳴き出した。私等は那人達の樣に、家産は無いけれど、斯うして、安かに、臥ながら春を迎へ

る事が能る。さうして見ると、那人達の飛て歩く氣が知れない。」と獨呟したのを、聞きつけた夫は、さも誇顔に、「ウム、お前をさういふ樂な身上にしたのは、眞實に誰の力だと思つて居る？」

其廿五　按摩

ある一人の按摩が、最早仕事を了つて、杖をつき〳〵、裏長屋の自分宅へ歸らうと　但ある路次口まで來たが、恰度其處に、一匹の犬が睡て居たのを知らず、杖て突いたから堪らない、犬はキャンキャンと叫んで逃て往た。按摩も、これは可哀相な事をしたと、思ひながら、二三間歩いて往くと、此處でも亦犬を突いた。乃て按摩は驚いて、『此犬の脊は、何といふ長いのだらう？』

其廿六　主人の顔

ある家の下婢が、誰も聞いては居らぬだらうと思つて、『主人の顔は、宛て猿に酷似だ、』と、云つて居たのを、小蔭て耳にした主人は、大さう立腹し、早速下婢を呼付て、『れい、手前は不屆な女ぢや、今聞て居れば、俺の事を猿ぢやと云つたな。』と叱つた。處が下婢は、首を下げ〳〵、『否、え、決して其麽事は申しません。そりや貴下樣の耳違てございましやう。』と逃げる。けれど主人はなか〳〵肯かず、『否々、確かに言たに相違ない。猿々と云ふ事は、確かに聞いた。』と追究すると、下婢は再び答へて云に、『實は申しました。確かに猿といふ事は申しましたが、なにも貴下樣のれ顔が、猿に似てるとは

申しません。猿が反つて貴下様の顔に似て居ると申したのです。』

其廿七　おき忘れ

横着な考を有た、宿屋の主人夫婦がありました。一日、荷物を澤山に所持した客人が、此に泊ると、主人夫婦は不良ぬ慮を廻し、何とかして、那荷物が欲いものだと、相談をした末、夫が、『なんでも、褒を食ると、能く物を忘れるといふ事だから、幸ひ今夜の膳に褒をつけて、明日那客の出立時に、荷物を持つ事を忘れさしてやらうてはないか。』と云ふと、女房は早速、『それが可からう。』と同意し、さて其晩食の膳に、褒を澤山使つて、れ客に出した所が、お客は何事も知らず、それを食べ、旅の疲れて、早く臥つて了つた。宿屋夫婦は、此態を見て大喜び、夜も碌々眠らずに居ると、早や夜明け、お客は先を急ぐ身であるからと、匆々支度をして、其宿を出立した。亭主は、其後に必ず荷物が置忘れてあるだらうと、勇むで往て見ると、豈計らん、何一ッ置てないので、傍から女房が、『たや、何にも忘れて往かないてはないか。』と責めると、亭主は、『何有、忘れるには忘れて往たが、荷物てなくて、勘定を忘れて往つた。』

其廿八　山茶花と水仙

ある時、山茶花が水仙に向つて、『吾々が、毎も折られて了ふのは、世間の人達が、其早く開くのを、賞翫する爲なのだから、何ても、力めて知らぬ顔をし、時に後れて開いたなら、屹度永生する事が能

るだらう。』と云ふと、水仙は、『成程、尤も然り。』と賛成して、聽て、世間知れずに、日を計り時を卜して、さて今度こそは、と澄した顏して、四邊を顧れば、豈許らんや、最う此時は、自分等の身體は、瓶の中に挿されて居たので……。

其廿九　放屁（其一）

ある客の前で、女が誤つて屁を放つた。客は、之を知つて居たが、わざと知らぬ眞似をすると、女は早く、其臭みを失さうと思ひ、香を出して來て、焚いて、客に、『此香は良い品ですから、嗅てごらんなさい。』と品めた。乃て、客は、それを嗅ぎながら、『藥師屋の前を、汚穢やが通るやうだ。』

其三十　放屁（其二）

ある劇場の三階、立見の場所で、誤つて失屁した婦人がありました、初のうちは、誰が其本尊であるかゝ知れぬので、甲論乙駁、一方ならぬ騒ぎとなつたが、遂に其本尊は、婦女であるといふ事にきまつたから、婦女は赤面せざるを得なかつた。時に一人が、什麼にも氣の毒に感じたので、『さう攻撃するものではない。婦女の事であるから、可哀相に、なるべく知らぬ顏をしてやるものだ。固よりそれが男であつたら、皆なもさうは騒ぐまいに……。』と云聞せると、先づ其儘で騒ぎも鎮まつた。其時に、其場に居合したある小僧が、尤もの次第と、餘程感心して居た樣子であつたが、其後二三日經て

から、先達て放屁した婦人に、途上て會つて、フト其當時の事を思出し、更に何う感じたか、周章て其婦人の傍に走りよつたが、『もし〳〵、那の先日演劇觀の時に、貴女が放た屁は、俺が身代りになりましやう。』

其卅一　三日前から

屋根の上にのぼつて、何か仕事を爲て居た男が、何ういふ拍子か足を辷らして、眞逆樣に地上に墮落ち、眼を暈して了つた。ソレッと云のて、大騒ぎとなつて、近所の醫者を呼びに行くと、醫者が來て、少時診察して居たが、後云には、『惜い事をした、最う手後れだ。三日前だッたら治るのだが……』

其卅二　旦那の影

ある夜盗賊が這入りました。暗闇を辿り〳〵て、漸く簞笥長持など、金目の物のありそうな室まて忍ぶと、主人が目を覺まし、手燭を點けて、其處らを搜し始めた。盗賊は、此有樣に、愕き周章たけれど、奥の方まて忍び込んだ事とて、容易に逃出す事も能ず、止むなく窮策を出して、兩手を張廣げ、力めて身體を、壁にピタリト拈着けながら、息を殺して居る。主人は暫て之を見着て『其處に見える のは何者だッ。』と吐鳴ると、賊は、『是は旦那の影ですよ。』

其卅三　大鼾

ある夏の事、用事あつて、出掛けやうとすると、驟に雨が降り出したから、唯た一本ほかない傘を出して、出掛やうとすると、向から走つて來る友人がある、大方自分の家へ、傘を借りに來るに相違ないが、一本きり無いのを、貸て了へば、自分は出掛る事が能ない、さりとて、一本きり無いといふのも、何となく極りが惡いからと、考へた末、家の中に飛込んで、急に眠つた眞似をして居た。すると案の定、友人が周章て這入て來て、頻りに自分を呼起す。けれども知らぬ顏して眠つて居ると、友人は、快々として歸つて了つた。後に、してやつたりと、忽ち起て、今度は裏口から、傘をさして、出掛て往くと、横町の角で、バタと友人に出會つた。其時のきまり惡さ、何うして可いか思案に餘つて、詮方なく、傘をさして立たまゝ、

眼をつぶつて、グー〳〵と大鼾。

其卅四　ハイお替り

或寺の和尚に、酒好なのがありました。けれども、人に與るのを吝んで、毎も厠へ入つて、秘に飲むで居たが、一日、此和尚留守になつたので、寺男が、此間に飲むでやりましやうと、大きな茶碗に、酒を出して來た。けれども、若和尚が歸つて來て、飲て居る處を認められては困るからと、これも毎もの和尚の眞似して、厠へ持つて往くと、何時の間に歸つたのか、自分より先に、和尚が厠に入つて、グビリ〳〵と、飲みながら、舌皷を打つて居る最中であつたので、寺男は大に面食ひ、如何しやうかと思つたが、忽ち氣を利かして、

『和尚さん、ハイれ替りを差上ましやう。』

其卅五　鼻療治

黴毒に罹つた人がありました。段々甚くなつて、鼻が腐爛れ出して來たので、友人に、『何處かに、此鼻を癒して呉れる醫者はないからうか。若し在らは、教へてくれ、何程遠い所でも、出掛て往て、療治をして貰うから。』と尋ねると、友人は、『直ぐ那處に在るではないか。ソレ家根に看板を出してる家さ。』と答へた。て、『あれは目醫者ではないか、何故なら、看版に大な目が二ッ畫いてあるもの。』と、復問ねると、友人は、『左樣さ、其目の畫いてある下に、藥といふ字が書いてある。其字の處が、丁度鼻のある處に當るから、鼻を療治

することは請合だ。』

其卅六　値踏み

或所に、好んて物の値踏を爲る人がありました。何でも、品物を見さへすれば、『これは何程の値打がある。それは何程する。』などとすぐに値段をつける癖なのて……。一日、別懇にする友人が來て、『君は、物を見ると、何でも其値段を附けるが、那は可くない事だ。商賣人なら兎も角も、苟くも君等が其麼事を言つては、品位に干係するから、今後其癖をやめた方が可い。』と忠告した。すると、其人は、大に其忠告を喜んて、『いや誠に有難う。君の今の一言は、僕の爲には實に千金の價がある。』

其卅七　食過ぎ

他所に饗應れて往つて、鯉腹飲食して歸つたものがありました。餘りに遠慮なく飲食たので、今にも腹が裂けはせぬかとばかり、苦しくなつて來たが、途中、フト乞食に遇つて、見れば、乞食は飢て弱つて居る樣子。乃て、『汝は餓いのか？』と問ねると、『はい左樣です。』と答へて、『何卒救けて下さい。』と賴む。て、其男は少時く、乞食の顏を見て居たが、『あゝ、汝は羨しい。何うかして此腹を汝と取換たいものだ。』

其卅八　貸家

或町に、惡い疫風が大さう流行つて、苦しむ者が多くありました。て、方々の家では、用心して、種々の禁厭なぞをする中に、唯た一軒、戸を閉て了つて、表に大きく、貸家札を貼つた人がある。一人が其理由を聞くと、『なに、斯うして貸家札を貼てれけば、疫風の神が、空家だとおもつて、通り過て行くからさ。』

其卅九　啞者

ある所に、横着な乞食が徘徊歩いて、啞者の眞似をして、椀を叩きながら、いと憐れ氣にして居ります。此事を知つてる人が、『汝は、眞實の啞者でもないのに、啞者の眞似をして歩行くとは。不都合な奴だ。だから、却つて皆が憎んで、何にも惠んてやらないのだ。』と

言しつた處が、唖者の乞食は、腹立紛れに、大きな聲を出して『何だと？汝は何うして俺の唖者てねゐ事を知つてるのだ。』

其四十　夫婦喧嘩

ある町の裏長屋に、下等な生活をして居る夫婦の者がありました平常夫婦喧嘩の絶間とては無いが、今宵は又格別の大喧嘩で、碌々ありもせぬ皿器鉢を投やつて、大立廻りを始めたので、隣家に住て居る老翁が、見るに見兼て、仲裁に入つた。先れ定まりの、まアまアて双方を取鎮め、さて、『何うして汝さん方は、さう喧嘩をするのか？。』と問糺すと、夫が膝を進めて云には、『まア先生お聞なすつて下せえ。今日俺は仕事から歸つて來て、一杯飲りながら、旅費を持つて、身輕に、おもしろく、從者の二三人も連れて、何處か見物に往くのが一番だと言ますと、此女め、（自分の妻を指して）其麽馬鹿々々しい事は厭だ。それよりか、平常着にも絹布物を被て、而して三度々々甘い物ばかり食べて居ると云ふのてさア。だから俺が、成程其麽大な口に、甘いものは可からうが、其麽見ともねえ面アして居て、絹布物を着た處で、飛んだ化物が出來上らアと云た處が、口減ずめ、俺に向つて、汝こそ毎日々々脚夫をして、足が健者だから、見物に出かけるは可いが、從者をつれて身輕になつてなどゝは、夫こそ柄に無いと拔かすので、餘り癪に障るから、拳固を一ツ呉れると、生いきに、俺に喰ひ付いたのてさア。此尼ッ。』と、倘も再び女房に摑み掛らうとするので、隣の先生、之を制して、『時に、汝さ

んの家は、昨日まで隨分困つて居たやうだが、今日は何うして、其處に富祐になつたのか？』と尋ねると、亭主は、『何有、今日だつても、明日の米が無いつていふ程の貧乏なんですが、先刻飲みながら一朝金でも澤山拾つた時に、斯うしやうッていふ話から、此女が嘲つた事を云ひ出たんてさア。』

其四十一　試合

或所に、劍術師と相撲取とが會つて、何方が強いか、試合をして見やうと云い事になりました。さて互に、充分の用意をして、挑み合ひ、虚々實々、エイヤッと、鎬をけづつて居たが、聽ての事に、相撲取が劍術師の身體を攫むや否や、兩手に高くさしあげて、『さア何うだ、負けたらう。』と云ふと、劍術師は、『未だ〳〵。』劍術の奥の手は、結末にならなければ出さぬのだ。今汝が、他を下に投げつけると、其時には、汝の首も地に隨ちるのだ。』と、頭の上て云はれて、相撲取は、敢て投る譯にも往かず、何うする事も能ないて、劍術師を差あげたまゝ、大な聲を出して、『人殺だ〳〵。救けてくれ！』

其四十二　橋の穴

今丁度橋の上を通る男がありました。すると、橋の板隙があつたのに心注かず、持つてた杖を、其穴に取落したので、少時見て居たが、何う思つてか、今度は扇を出して、又板隙から投墜して見て、思案の末、『こりや理窟は一ッだワイ。』

其四十三　理髪床

ある日、髯をぼう〳〵と生した男が、理髪床にやつて來ました。

聽て其髯男の番になつた處が、理髪師が誤つて、男の髯を、悉皆剃り落して了つた、て、男は大に怒つて云には、『俺は、此髯があるために、立派なお邸に出入して、高い給金を貰つて居る者ぢや。それを、今此樣に、悉皆剃り落されて了つては、明日から給金を貰ふことが能ない。給金を貰はなければ、食ふ事が能なくなる。食ふ事が能なければ、死ぬより外に道はないのだから、何うせ死ぬなら、汝を殺して死ぬから、左樣思へ。』と、一方ならぬ言分に、理髪師は、眞青になつて、何うしやうかと考へた末、此事を隣家の物識に相談

に及んだ。すると、隣家の物識も、捨て置けぬと云ふので、其場に出て來り、立腹せる髯男に、懇々と詫をして、漸く金を出して濟む事にし、幾干を遣つて、髯男は出て往つた。それから、暫く經つてから、今度は、一人の僧が理髪床に入つて來て、頭を剃つて呉れといふので、見れば此僧は、暫らく病氣で臥てゐても居たと見え、髯まで可なり長く生えて居る。乃て、理髪師は、此前て凝り〳〵して居るから、僧の髪だけ剃り落して、髯だけ殘してゐた所が、僧は之を知つて、『何故髯を剃り落して呉れぬのだ。』と云ますから、一圖に、又此前の轍を履むては大變と、思つて居る理髪師は、『此野郎、また此前の手を喰はして、錢を圖賴らうと爲るんだな。』と、敢因き看破つた如に云ふと、僧は大に怒つて、『金錢を圖賴るなぞとは、不埒千

萬愚僧を貧乏と侮つての此仕打、許しはせぬぞ、考へても見よ、苟くも僧侶の身にして、髯を蓄へたく理由やある。今一言云ふて見よ、此分には捨て置かぬ。』となか〳〵厳めしい談判。遂に事は破裂に及むで、理髪床と僧との掴み合が始つた。て、此騒ぎに、何事が起つたのかと、表へ駈出した隣家の物識、少時見て居たが、今日は留めやうとも爲ずに、家の中に引込んで了つたから、其理由を問くと、曰く、『彼僧は、先達ての髯男が、那麽風をして來たのだらう。若しさうだと、今度は少許の金では済まされぬから、仲裁は真平々〳〵。』

其四十四　三年坂

京都の町から、東南六里の所に、三年坂と名ける坂があるさうですが、何故三年坂と稱ぶかと問いて見ると、誰でも、此坂に來て轉ぶと、命が三年保たないから、それで三年坂と云ふのだと、言傳へたのださうです。さて此坂に、一人の老翁が來て、誤つて躓き轉んだので、老翁は大に氣にして、最う自分の歳は、此先三年を保たないと、毎日々〳〵に泣いてばかり過して居る。所が此事を聞いて某人が、非常に氣の毒に感じて、何とかして慰さめてやらうと思ひ、一日老翁の家へ訪ねて往つて、『汝さん、決して嘆くことはありません。私が好い方法を教へて、汝さんの命が延びるやうにして上やう。』と云ふので、老翁は大喜び、『何卒、其麽法があれは教へて下さい。』と拜むやうにして頼むと、『何有、譯も無い事だから。』と云つて、『實は、

今一度、那の三年坂に往つて、汝さんが轉べば可いんだ。』と聞かされて、老翁は怒るまい事か、血眼になつて、『餘り人を馬鹿にするな、一度轉んでさへ三年生きぬといふのに、再轉べは、死ぬのを催促するやうなものだ。吁、鶴龜々々。』と云つて、また泣き出した。然うすると、件の男は、沈着拂つて、『老翁さん、それだから不可い。さう怒らずに、私の云事をれ聞なさい。一度轉べば三年て云ふのだから、二度轉べば六年、三度轉べは九年の間、命を保つて居ることが能るぢやありませぬか。』と云たので、老翁は『成程。』と悟つて、早速三年坂に往つて、丁度十遍轉び、『今年は私は七十ですから、これで丁度百歳まで生きますね。』

其四十五　狐（其一）

或村端れに、毎晩狐が出て、人を魅すといふ評判がたちました。某人が之を聞いて、『何有、狐といふやつは、何程魔力があつて、人を魅すと云つても、徳には打勝ことは能るものではない、其證據には、俺が往たら、必ず魅す事は能ぬ。』と威張るので、『其麼ら、今夜往て見なさい。』と衆人が勸めた。『宜しい。』と云て、其晩出掛て往くと、何にも變つた事はなく、大威張て歸らうとすると、フト、途傍に銀貨の落てるのに氣がついた。『ハテナ、此麼場所に銀貨などの落てる筈は無いから、大方、狐が窮した餘り、これに魅たのだらう。可し〳〵、其麼手に乘るものか。』と、キツト思案を定めて、其銀貨

を踏躙つて、其儘行過ぎ、後振顧つて視ると、何の變りもなく、ピカ〳〵光つて、依然銀貨の姿である。『ハテナ。那麼に強く踏躙つたのに、變りがない所を見ると、狐の化たのではなくて、眞實の銀貨なのか知ら……。』と首を傾けながら、尙五六歩行き、又振顧つて視ると、相變らずの銀貨。て、『それては矢張自分の考へ違であつたのかな。銀貨なら勿體無いことだが。と思案しつゝ、又も五六歩進んで、能く視ても、何うしても銀貨に相違ないから、『此りやア、天から自分に授かつたものに相違ない。ドレ拾つて歸らう。』と、後戻りして、さて其銀貨を拾ひ上ようとすると、非常によく粘着て居て、漸との事で上げて、『難有い。』と云うとすると、其銀貨が、金切聲で、

『それに相違ないよ。』

其四十六　狐（其二）

これも狐のお話ですが、一日獵夫が銃を持て漁に出掛けたが、此日は何の獲物もなくて、唯一匹の小狐を生擒にして、持て歸つて來た。而して、明日になれば、町に賣りに往かうと思つて居ると、其事を聞いた隣家の男が、『何ても狐は、自由に人に禍福を與へるといふ事だから、ちッと自分の貧乏して居るのを救けて貰ひたいものだ。それには那の小狐を買取つて、明日親狐に還してやつたら、悅んで其禮に、俺の希望を叶へて呉れるに相違ない。』と合點し、乃て隣家の獵夫の家へ往て、それとなく小狐を買取つて。斯くして翌日、山に往て、狐の居さうな穴を探して、小狐を放しやり、穴の中に向つ

て云ふには、近頃、俺の家は貧乏して、其日の生計にも困るから、汝の子を救けて遣つた代りに、俺に福を授けて呉れ。』と、人に物言ふ如く演べると、中から、大きな狐が現はれて來て、『何うも難有うございました。決して貴下の御恩は忘れません。何とかして、貴下に福の授かる樣、骨を折りましやうが、元來、手前は、未だ功淺く、靈拙いために、充分人樣に福を授ける働が出來ますか如何ですか。』と、なか〳〵謙遜した口上に、男は大に力を得て、喜び勇むで我家に立歸り、今日は福があるか、明日は幸が來るかと、毎日々々待て居ると、豈計らん、幸福どころか、健在てあつた母親が、僅かの患て歿して了ひ、續いて妻と子が、同じ病氣で亡くなつて、今では自分獨りとなつて了つた。て、有繋の男も、狐の口上が當にならなかつたのが怨めしく、果は憎らしくもなつたので、非道い目に遭はしてやらうと、それ〳〵仕度をして山に往き、前の穴の前に往つて、吐鳴立ると、覺えのある大狐が出て來たから、『汝は、何ら畜生とは言ながら、恩を忘て返すといふ事があるものか。現在俺に福を授けると言て置きながら、家内の者が、死絶にて了ふ樣な事を爲んても可いてはないか。今日は、俺の方から、此怨恨を晴してやるから、左樣思へ。』と、涙を流して云ふと、大狐は、謝りながら、『否、否、左樣の義てはございません。前申上げた通り、手前は未だ人樣に福を授けるやうな德はございませんから、せめては、貴下のお話になつた、其日のお生計を救ける事ても致さう。それには成るべく、人數を減らしたなら、大分生活の費用も違うてしやうと思つたのてした。』

其四十七　狐（其三）

これも昔の話ですが、或屋敷へ出入の道具屋が、毛巾着をたのまれて、王子の稲荷に參詣した歸り、本郷の古道具見世で、狐の皮の煙草入に、尻尾を煙管筒にしたのを買ひ、又宅の小供への土產に、唐の芋を二個買て、家路を急ぐと、途中で日が暮れかゝつたから、駕を傭つて乘りましたが、早やお茶の水邊りに差かゝると、月は中天に懸り、物凄い程冴渡つて來た時分、駕舁がフト視ると、駕の外へ、何時の間にか、狐の尻尾が出て居る。駕舁は不思議に思つて、『もし、貴下は、王子かられ出だと彼仰たが、市ヶ谷は、何處までお出になります。』と尋ねるから、道具屋は、『茶の木稲荷の近所まで。』と答へたので、駕舁どもは、必然これは狐の化たのであらうと早合點し、言合したやうに、前後から、『旦那、突然の言分ですが、是非お願ひがございます。』と云ふので、道具屋は、『何だ、酒手が欲しいのか。と反問すと、『何う致しまして、酒手なんか、貴下さまのものを！。それよりか、何うか俺等に、福を授けて下さいまし。』と、頼入る樣が、何となく變なので、道具屋も不審に思ひ、フト自分の持てる狐の尻尾が、駕の外に出て居るに氣附き、『はゝア、さては俺を狐だと思つたな。よし〳〵、其麼ら、俺にも量見がある。』と、乃で、わざと知らをきり、『明日は、半田の稲荷まで行くのだ。と意味ありげに云ふと、『それは何うも御苦勞さま。』と、駕舁は何處までも狐と確信して居る樣子。聽て、約束の茶の木稲荷まで來たから、道

具屋は、袂から唐の芋を出し、『これを汝だちに遣らう。』と出すと、慾張つた駕舁は、何か福の授かる種と心得、難有がつて押戴いてる間に、道具屋は一目散。此樣子を先刻から藪陰て見て居た、眞の狐二匹、『おい、今のを見たか？』『されば さ、今時は、素人でも油斷がならねえナ、』

其四十八　狐（其四）

今一ツ狐のれ話。ある田舍て、狐が出て人を魅して詮方が無いといふ事を、力自慢の男が聞いて、『俺が退治てやる。』と、其場所へ往て待て居ると、突然十六七の美しい娘が現はれて、『私は向の村まて往くものですが、何うかれ連れなすッて下いませんか。』と云ふ。男は茲ぞと、『何に？、此狐め、俺を魅さうとて、其手に乘るものか。』と云ひながら、拳固を振上げ、『出直せ、〳〵。』と叫ぶと、忽に男に化けた。乃て、又、『汝は前刻の狐だ、止にしろ。』と吐鳴ると、今度は老爺になる。老婆になる。石になる。玉になる。種々の姿に化けたが、『皆古い〳〵。』と言放したので、狐も力竭きてか、眞の姿に復つて、男の前に現はれた。て、『それ、此狐め、生擒にして呉れるぞ。』と、再び拳固を振上げると、狐は打れては大變と逃出す。取逃しては成らぬと男は追蒐ける。追かけ〳〵て、但ある藪中へ逃込んとする處て、追付て、尻尾を捉へ、力一ぱいに引張る拍子に、狐は最期の悲鳴をあげて、其尻尾が拔けたから、せめてはこれを村への土產にしやうと、立去る背後から、百姓がドラ聲あげて、『何故俺の畠

の大根を拔いた？』

其四十九　貧

ある家に盜賊が這入ました。主人が之を覺つて、何とかして捕へようと思ひ、密と出口に待伏をして居ると、それとは知らずに、盜賊は、室の彼方此方を見廻して居たが、不審い事には、此盜賊は、欲深くない者と見えて、成る可く、良くない品物少許を持つて、室を出て了ひ、今度は臺所の方へ往つて、暫く出て來なかつたが、纏て又、元の處へ出て來ると、今度は、少時思案して、最前盜んだ少許の品物を、其處に置いて、元の空手になつて、密と歸りかけたから、今かくと、手ぐすね引いて待て居た主人は、愈よ不思議に思

つて、先づ、突然に、『こら盜賊ッ。』と叱鳴つて置いて、『汝は緩慢な盜賊だ。大抵の盜賊は、成るべく澤山品物を、持出さうとするのに、今見て居ると、先刻取つた物まで、置いて往かうとするのは、何うした譯か？』と物柔かに尋ねると、盜賊は、大に驚き、さも面目なげに、『實は、手前は盜賊ではありませぬが、餘りに貧乏て、其上昨今は、身體が不勝て、其日々々の生活さへ立兼ね、今日て、最う三日も食事を爲ません。先刻、此家の前を通りかけ、フトした出來心から、忍び入つて、那だけ品物を持出しましたが、後て、臺所へ往きますと、澤山蕎麥粉があるのを見て、急に食べたくなり、夢我夢中て、腹一ぱい食べましたら、それは蕎麥粉てなくて、灰てあつた事か分明りました。けれどもれ蔭樣て、飢ひ事を忘れましたから、

最早品物は要りませんゆへ、此、處に置いて往かうと致します處、れ目にとまつて、何とも面目ありません。』と、一伍一什を物語つた。乃て、主人は、其心根を憐れと思ひ、更に金品を與れて遣たと申します。

其五十　名刀

今は昔、有名な刀鍛冶が在りました。一振を鑄るには、何うしても三ヶ月はかゝるので、諸處からの注文が、澤山あるのに間に合はず。自然其價打も、次第に高くなつて、それでも競ふて買ふ有樣であつたが、或時、一人の農夫が、此事を傳へ聞いて、何とかして其刀一振作つて貰ひたいと思ひ鍛冶師の家を訪ね、『何卒一振作つて貰ひたい。』と注文した所が、何せ農夫の事であるから、刀鍛冶が見くびつて、『迚も汝さんなどに、買ふ事は能ないから止した方が可い。』と取合ない。けれども、農夫が切に頼むので、『其麼ら作つてもやらうが、代價は百圓で、是から先三ヶ月經たなければ出來ないが、それで可いか？』と言ふと、農夫は、『百圓と云ふ金は、生れてから見た事もない。』と云つて溜息を吐く。『だから、迚も汝さんのお歯には合はないと云ふのだ。』と云つて、刀鍛冶は笑つて居る。農夫は少時考へて居たが、『では斯うして下さいませんか。私が毎日山に入つて伐り出す薪の中、一搗づゝの代價を蓄めて置けば、三年經つて拾圓になりますから、其時其拾圓で、刀一振讓つて頂くやうに、それを背屈けて下さいませんか』と一向に頼むだ。刀鍛冶は、心の中に、

『此男が那麼事を云つても、迚も三年の間休みなしに、辛棒が出來るものか、よし、只口先で請合てれいてやらう。』と、今より三年先の日に、拾圓で賣つてやらうと云ふ事に、承知をしたので、農夫は大喜びて歸つて往つた。すると、月日の經つは早いもの、何時しか三年を經過して、其約束の日になると、例の農夫が、拾圓の金を持て、『約束の刀を下さい。』と取りに來た。刀鍛冶は、最う疾に忘れて了つて居たのに、此有樣だから、驚いた。けれども、今更約束を履まぬ譯にも往かず、止むなく、『實は最早作らへてはあるが、尙一度砥礪かなければならないから、二日間猶豫してくれ。』と嘘を言つて兎も角農夫を歸してれき、近所の古道具屋から、二三圓の刀を買つて來て、それを拾圓で農夫に渡して遣つた。農夫は何事も知らない

から、三年の間辛苦して、買取つた名刀とばかり、大切にして、肌身離さずに持つて居た。其中に一日山深く這入た時、巨な蟒に出合つたから、此名刀さへあらば、何の怖しい事もないと、自ら蟒に向ひ、鞘を拂つて進んで往つた。蟒は、矯々として舌を吐き、薄り隱んで將に農夫を一呑に呑んず勢ひ。それを前に扞ぎ後に拒ぎ左に拂ひ右に擊ちして、暫し鬪つて居ると、蟒の方が敵はなくなつて、遂に何處へか逃げて了つた。農夫は、我ながら其名刀の靈光の難有さに、戴き拜んで鞘に納め、いざ我家に立歸らうとする時、最前から此有樣を、樹蔭に見て居た士が、農夫の傍に立寄り、其持る刀を賞揚稱へて、『何うか百圓で私に讓つてくれ。』と頼むだ。けれども農夫は、『金には換られない。』と云つて斷つた。それを又士が、『けれど

も汝は、如何に名刀を持て居ても、農夫は何處までも農夫だから、それよりは、百圓の金を資本にして、安樂に田畑を耕す法を立た方が安全てはないか。』と、分を含めて說き諭した處が、農夫も成程と感じて、乃て士の望に任せ、元拾圓の刀を百圓て讓つてやつた。士も大ひて、立別れたが、後て其刀をしらべて見ると、名刀ても何てもなくて、平々凡々のものてあつたと申します

其五十一　妙藥

ある人風邪の心地て醫者にかゝると、『これは殘のせいぢやから、これを飲みなさい。』と、妙な藥を與へ、翌日又診察に來て、『昨日よりは、餘程惡くなつた。惡い腫が出來たのに相違ないから、今度は此藥を。』と、又變つた藥をれいて往つた。處が、其後へ友人が見舞に來て、『病氣はどんなてす。』と尋ねるから、家內の者は、『れ醫者さまの云ふのには、昨日は丹だと申しましたが、今日は朱だと云て、此麼藥を下さいました。』と話したら、友人は、少時考へて居たが、『ウム、その赤くなる病には、俺が妙藥を知つて居る。貴は、俺の子供が、先達て疱瘡に罹つた時、紅を顏へ塗つて、大そう良く癒つた、貴宅の病人も、朱から紅にならない中に、上から塗るが一等良い』と、勸めて、病人こそ可い災難、ペッたりと紅を顏中へ塗られて了つた。さうする中に、病人が鼻を拭でくれといふから、家內の者が、紙を病人の鼻に當ると、逆上せて居るものと見ゐて、鼻血が迸山出た。乃て、友人は得意顏に、『藥の利目は怖ろしいものだ、見ゐ

さい、難有い事には、丹から朱になつて、鼻血が出たから、赤いものはこれきりだ、最早癒る事は請合々々。』

其五十二　茶漬

武藏野の茶漬といふ見世を出した者があつて、非常に繁昌して居ると、一日友人が訪ねて來て、『大繁昌で結構だ。時に、立障子に、むさし野の茶漬と書いてあるが、こりや些と無理ではないか？』と尋ねるから、亭主が、『それは又何故か？』と反問すると、『何故ッて、茶づけの始りは、淺草に海道茶漬、銀座に山吹茶漬といふのが出來たのが、一番の始りて、宇治の茶に山吹といふのが有るから、それで意味も聞えるのだが、むさし野の茶漬では、何だか變ぢやないか。』と云ふ。亭主は驚いて居たが、『成程、さういふ事は、他も聞て居たが、むさし野茶漬だつて、解らない事は無い積りだ。』て、友人は、『其麼ら、何ういふ義だ。』と問ねると、『むさし野茶漬と稱けたのは、ばら一ぱい喰せる思ひ月さ。』

其五十三　井戸の水

ある長屋の共同井戸に、水浴をして居る元氣の若者がありましたかれこれ時刻も迫つて、夕飯間近くなつて來たゝめ、申合せたやうに、長屋中の若い、井戸端會議の議員連中が出かけて來て、恰度幸ひ、若者に水を汲て貰つて居ると、若者も最初の内は、面白半分に、汲てやつて居たが、其中に力も減るし、可厭になつて來たので、可

い加減に、着物を被やうとすると、其處へ、遲ればせに、長屋の端に住つて居る、八十近くの婆さんが、よろ〳〵しながら、手桶をさげてやつて來て、若者に、水を一ぱい汲て呉れと頼む。處が、散々汲せられて、厭になつてる若者は、知らぬ顔して居るから、傍に見て居た議員が、『其麽こと爲ずに、れ婆さんが可哀相だから、序に一ぱい汲てれ遣りな』と口々に云ふので、若者は否みもならず、不承〻〻に、先づ井戸をのぞいて見て、『れ易い御用だが、水があれば可いが。』

其五十四　牡丹

ある寺に、牡丹の花があつて、毎年美事に咲くといふ、評判である

るけれども、其寺の和尚は、他人に見せる事を喜ばない。て、人が觀せて呉れと云うても、花は最う散て了ひました。』と玄關で斷らせて居たが、一日女中を連れた人が來て、女中に、『是非一度美事の牡丹を拜觀して下さい。』と申込ませると、玄關で、『花は最う散て了ひました。』と斷つた。すると、女中が、『それなら、せめては散た跡でも宜しうございますから……。』と頼むので、玄關の者共、これには當惑して、實は未だ散はしないのだが、和尚の吩咐で、さう云て皆樣に斷るのです。けれども、尚一應和尚さんに、頼むで試てやるから、少時待ちなさい。』と云て、再び出て來て、『其麽ら、れ前さん達だけに觀せるから。』と云て引込んで了つた。女中は喜んで、此事を主人に申聞け、充分觀て、其日は歸つて往たが、翌日になると、又

やつて來て、『昨日は難有うございました。實は主人が非常に氣に入ましして、今一度拜觀して頂きたいと申しますので、今日も上りましたから、何うか和尚さんに、宜しくれ取なしを……』を頼むので、昨日の今日ではあるし、同じ人といふのだから、止むを得ず、觀せて遣ると、其日も大喜びで歸つたが、又其翌日になると、女中がやつて來て、『何うも主人が、餘り美事なので、思ひきれないから、今日限り、今一度觀せて頂きたい。』と頼むだ。斯うなると、早や玄關の取扱ひには往かぬから、和尚に相談すると、和尚は、『餘程、風流な閑人と見える、全體何處の方だか聞いて見ろ。』との事。すると、女中は、今日て三度共連れて來た人は違ふのだが、左あらぬ顏して、『實は主人と申すのは、後家でございますが。』と云ふのを發端に、大家の樂隱居であるといふ事に、眞と嘘を混ぜて話したので、和尚は、心を動かし、後家とあらば……、富貴とあらば……加之も風雅を好む樂隱居とあらば……と、好奇心につられて、其廢人なら、嘸容姿も美くしい方であらうと、乃て今日も承諾し、庭へ通つて、花を眺めて居る後家の、ゆかしい姿を、障子の隙からのぞいて見て居たが、軈て、其顏を見ると、想ふには違ふて、後家の鼻が著しい獅子ッ鼻。

其五十五　白眼競

ある所に、白眼競の會といふのを催し、恰も角力の如に番附をしらへ、東西に分れて、土俵にあがり、睨み合ひ、先に笑つた者

負といふ事に決めました。さて、行司が出て、段々と番數を重ね、大關の番となり、東大目玉、西眞面眼顔といふ顔觸れ。双方立向つて、睨み合つたが、何せ大關同士の事とて、しばらく勝負つかず、しば〳〵水をのませ、再び必死をつくして睨み合たが、其中に、双方とも、だん〳〵眼玉が痛くなつて來て、言合したやうに、手を出して、眼をいぢらうとすると、見物から聲あつて、『こすりはならぬ〳〵』

其五十六　玉手箱

ある家の息子、堀貫井戸をのぞいて居る中、何うした拍子か、井戸の仲へ落ちました。處が此井戸は底なしてあるために、息子は其儘、深く中へ沈むて往くと、やがて、但ある大海へ出て、續て金銀珠玉をつくした樓門の前に往つた。其處には、海月の門番が立て居て、『其方は何者だッ。』と大喝一聲。て、息子は、『私は日本の者ですが、一體此處は何處なんです。』と問へば、『此處は龍宮城だ。』と答へて、『汝は怪しい奴だに依つて、詮議の筋があるから、此方に來い。』と、忽ち息子を引捕へ、龍王の御前に引据ゑ、いろ〳〵の大魚が集り、嚴しい詮議に及んだが、別段怪しい點もないので、其儘客分となり、暫く龍宮滯在といふ事になつた。斯て息子は、毎日山海の珍味で馳走になつて、爲す事もなく遊んで居るものゝ、日を經るに從つて、故郷の日本が戀しくて〳〵ならぬ處から、遂に何とかして、此城を抜け出たいものだと思つて居た。其中に、遠くて近きは男女

の仲、息子は何時しか、龍王の娘乙姫に懸想し、亦乙姫も息子を憎からず思つて、互に隔意なくなつた所から、一日息子は乙姫に秘密を打明けて、共に日本に欠落しやうと云ふ相談になつた。て、息子が一足先に逃出す事になつて、愈よ一夜乙姫の指圖に依て、玉手筥を持ち、密かに城門を脱け出て、一生懸命に泳ぎ〳〵て、ある海邊まで着いたが、何分暗さは暗し、疲勞て居るので、フト躓いて、大事の玉手筥を投出したゝめに、蓋が開いて、中から種々の寶が出たから、周章てそれを拾い集めて居る處へ、鯱をはじめ、鰐、鮫、其外多くの追手が追かけ來り、息子を捕へて、『此處に居た〳〵。』と、突然、襟髪引掴んで、其顔を見ると、若き息子と思つたのが、年寄つた老爺なので、『吁、若し、此處へ若い男は來なんだか？』

其五十七　爪の尖の火

殊の外客嗇の男、或家に夜咄に往て、『兎角何事も、勘略が第一でござる。第一頭の髪なども、坊子にして居るがよろしい。又御飲の菜には、干物が第一。而してこれも、朝は頭をとつて、能く燒て、揉でキラズの汁の中へ入て喰ひ。其あとを、片身づゝ、一日隔に喰れば可い。斯云ふ遣方は澤山あるが、追て段々傳授いたさう。』とて其晩は歸る事になつた。て、其家の主人が、『これ火を待て來い、お客さまの履物が見えないから。』と注意するのを、『何有、直き知れさすから、其麼お手數は……。』と打消す。『でも暗闇たもの、何うして知れましやう！』と主人が云へば、客嗇男、『否ゐ、爪の尖の光明で

見ます。』

其五十八　ハイカラ

ある若き男、性質横着でありながら、唯目に見える所だけ磨き立て、香水やチックを附て、氣取て居るのを、皮肉な人が、『何うも此節の若い人は、無性で可けない、見た所ばかり奇麗にして、見ぬ處は打捨つておくから、身躰に虱がわいてる。』と云ふと、氣障男は、『私は、其麽虱なぞは、藥にしたくも無い。眞のハイカラと云ふものは、實に立派なものだからね。』と氣取り、我見よがしの素振をして居ると、豈計らむ、其當人の襟首に、虱が一匹這て居る。それを皮肉家が見つけて、『それ、君の襟に本尊が出現して居る。』と嘲笑う

と、ハイカラ先生は、至て澄ましたもの、『はゝア、喰をすれば影がさす。』

其五十九　流行謠

姉は實子、妹は繼子の二人の子をもつた人がありました。兎角、我生んだ方が可愛くて、妹には辛く當るので、性質温順しくて怜悧であつた妹だが、母親の氣に染まなかつた、處が元來、母親が無筆のために、或時、妹の袂から、何か字の書いてある紙片を拾つて、これは大方、妹が情夫でも拵へて、それから貰つた手紙であらうと推測し、丁度妹の居らぬを幸ひ、姉を呼むで、『近頃那子は、何うも擧動が變だとおもつて居たら、案の定、此麽男の手紙があつた。』と

云ふから、姉は、『那女に限つて其麼事はありますまい。』と辯解すると、『否や、和女それだから不可い。兎に角、何と書てあるか、これを讀むて御覽。』と云はれるので、姉娘が、手に取て見ると、（まゝよ田舍もまた住よかろ）と、俗謠の一ト節が書つけてあつた。それを母親が聞いて、青眼鏡をかけて物を見れば、青く見える道理に背かず、『はゝア、那女太いあまだ、欠落をする氣だな！』

其六十　賽錢

ある男、村の鎮守に參詣して、切りに拜謝祈願をして居ります、其述ぶる所を聽くに、『何卒、私に、金百圓授かるやうに願ひます、さうすれば、お賽錢九拾九圓を上げますから……』といふ。すると傍らに友人が居て、聞くに聞きかね、『何といふ汝は、詰らぬ事を願うのだ。百圓欲いために、九拾九圓の賽錢をあげては、何の役にも立ぬてはないか。』と云ふと、男は平氣て、『何有、汝こそ、其麼事を云ふものぢやない。乃公は神樣を瞞す積りなんだ。』

其六十一　聾者

ある所に、聾者て物識の老人が居りました。一日、骨董舗の前を通ると、山水の掛物が出て居るので、能く視ると其書師は、名高き、夫の探幽に相違ないと見たから、『此ア探幽の山水てはないか。』と問ねると、骨董舗の主人は、頭を掉つて、『左樣ぢやありませぬ。これは探幽の畫たものです。』と答へた。何うも變な返詞だが、老人

は聾のために其云ふ事が聞ねず、唯頭を掉たのを見て、自分の鑑定が違つたのだと心得、『あゝ、俺もこれを見違へる樣になつては、最う駄目だ。』と、我身の不甲斐なくなつたのを嘆じたが、何ぞ知らむ、此老人の鑑定は、確かに違はなかつたが、唯骨董舗の主人が、同じ聾者であつたのだ。

其六十二　貧乏神

ある所に神社があつて、此神を祈念するものは、福が授かると云つて、なか〳〵の繁昌であります。それに引換へ、今一ッの神社があるが、其方は、一向利目が無いと云つて、一人も參詣するものが無い。て、此貧乏神は、什麼にも口惜しく思ひ、何とかして、自分の方にも、參詣者を多くしやうと、種々考案を運らした末、其村の某人に魅移つて、其者を村長の宅にやり、『何故俺の方にも、人々の參詣するやうに、骨を折らぬのだ。』と叱らせると、村長は、恐る恐る、『實は其事も承知を致して居りますが、何分、貴神の方は福が授かりませんので……。』と答へる。乃て、神の再云るゝには、『ては兎に角、村の處々に、貼札を出して、衆人に俺の方に參詣するやうにと勸めろ、それても若し、誰も來なければ、此方から衆人の家に出懸ける事にする。』

其六十三　昔氣質

往昔は然る身分の人、今は零落れて、見る影も無き哀れな生活を

して居りますが、其心は、所謂昔氣質で、商人を見れば、直に、『那は町人ぢや。』と云て、頗る横柄な取扱ひをして居たが、一日、見るからに、乞食同樣の襤褸を纏ふて、町を歩行きながら、但ある骨董舗の前まで來ると、何か目に注いた物があると見ゐ、其店に立寄つて、我身姿の、見すぼらしいのも耻ず。昔口調の厳しく、店に居た主人を、眼下に睥睨して、兎や角と、一品物を品評して、後歸て往つた。すると、最前から、此場の有樣を見て居た、他の骨董舗が、他人の事ながら、餘りに其言葉が不遜であつたを怒り、『那老耄め、何を言てやがるんだ、人を馬鹿にして。何といふ失敬な奴だらう。』と罵ると、主人は、『まア其麼に怒るものぢやない。』と宥めて、復云ふには、『那で可いのだ。若那人が、那麼に横柄に物を言はずに、へいこら〳〵して居れば、それこそ那人は乞食だ。』

其六十四　大黒天

慾深き人がありました。朝から晩まで、大黒天を祭つて、『何卒私に福の授りますやうに……。』と祈つて居るが、近頃は、福どころか、寧ろ禍のみあつて、爲る事爲す事、損ばかりなので、終に大に怒つて、神棚から、其大黒天の像を取卸し、小僧に命じて、何處かの野原へ、棄てさした。て、小僧は、『勿體無い事をするものだ。』と思ひながらも、主命默止し難く、大黒天を抱いて、棄に出掛ると、途中或人が其を見て、『汝は其大黒天を何うするのだ。』と尋ねるから、『實は棄に往く所です。』と答へると、其人は、『それは如何にも勿體

ない事だから、私が買はう。』と云ふ。小僧も、楽る事を好まぬのだから、これ幸ひと、直に何程かに賣つて、金を持つて家へ歸り、斯々の次第と、主人に告げると、主人は喜ばしい顔もせず、溜息を吐きながら、『吁々、那大黒め、再新しい主人をつかまへて、金を費はせるのだな。』

其六十五　新亡者

地藏に於て、或時閻魔大王が、部下の百官を集めて宴會を開きました。所が此日、新亡者が一人あつたので、其掛官が伴て閻王の前に來て、其亡者の、婆婆にれける罪狀を具申し、其處分を請ふた。何せ、當日は宴會の事てはあるし、時しも宴酣て、閻王の御機嫌斜ならぬ事とて、閻王は醉眼朦瓏として、等閑に聞過し、何の取調もなく、直に其亡者をば、極樂國に斷發せられた。斯て此日の宴會も果て、閻王の醉醒て、始て帳簿を閲ると、新亡者を極樂國に遣たのは、全く間違ひてあつた事が分明つた。乃て、急に使者を極樂に立て、其取拔ひの誤てあつた事を述べ、奪返す談判に及むだ所、極樂國の大士、出て使者に向つて云には、『最早、事手後れてす、此段は斷り。』とある。使者は重ねて、『何故か。』と問ふと、大士は嚴然として、『那新亡者には、身體中に、最早金箔をれいて了つた。』

其六十六　嫉妬

非常に嫉妬心の深い女がありました。亭主は又非常にそれを畏れ

て居たが、一夜、隣家が何か喧しいので、夫婦が立聽して居ると、隣家の喧しいのは、夫婦喧嘩であつて、其原因は、夫が他に情婦をこしらへたと云ふ事である。之を偸み聽した此方の妻は、忽ち不平の顏付をして、突然拳固をふりあげ無心で偸聽して居る亭主の頭を、ポカーリ一ツ喰はした。乃て、何程好人物の亭主でも、大に立腹し、『汝は氣でもちがつたか。』と云と、妻は平氣で、『否え、妾は狂氣なんかには成りませんよ。』と答へる。『其歟ら何故亭主の頭を打たりするのだ？』處が妻の言分には、『そりや所夫、所夫が隣家の人を見たやうな事を、此先爲ないやうに懲して置くのですわ。』

其六十七　兩換

ある人が、急に夜半に、小錢の必要が起つて、小僧に命じて、紙幣を兩換せしめた。小僧命を奉じて、表に驅出して往たが、最早時刻が遲いので、何處の家も寢て居る。けれども其兩換舖を知つて居る小僧は、氣を利かして、ドン〳〵と表を叩く。中から、『何人？』と問ねるから、『直ぐ向ふの者ですが、小錢が欲いので……』と言へば畢らず、中から、『俺等も、長い間不景氣のために、錢を欲いと思つてるのだ。』と答へる。變だと思つて見ると、其家は兩換舖ではなくて、其隣の人力車屋！

其六十八　魔窟

ある繁華の町の一部に、劇場、寄席、觀物などが澤山あつて、北

處は又、一種の淫猥なる商賣を、秘かに營む輩の巣を構へて居る別天地、所謂魔窟とも稱すべき場所であります。て、此所ばかりは、風俗習慣凡て、世間とは變つて居るので、其土地に生れ育つた子弟は、自然妙な者になつて了ふ。と云ふ事を、平常から慨して居つた一人の、道德堅固の先生、近頃何う感じてか、自分の家を此魔窟内に移さうと決心した。變れば變るものだと、單純な推測を下して居る世人は、唯其風評ばかりしたので、此事何時しか、魔窟内にも響き渡つた。愈よ事實其の如になりそうなので、遂に魔窟内の頭立た人々が、會議を開いて、決して此先生を、我々が領分内に移らせてはならぬ。と決議するに至つた。て、其理由を問くと、頭立た人の云ふには、『那人を此地に容れると、我々の子弟を、悪な人殺しく云て詮して了うからさ。』

其六十九　雀を捕る法

ある人、必要があつて、雀を澤山捕る法を考へて居りました。けれど、好き考へも出ぬので、困つて居る所へ、友人が來て、「それは譯のない事だ。」と云ふから、喜んで、其法を尋ねると、「其法は、時候は先づ夏が最も宜しい。其夏の天氣の可い日に、柿の葉を澤山屋根の上に列べて、その上に、糟を蒔てれければ可い。」と云ふ。乃て、『さうすると何うなりますか？。』と再問ねると、「さればさ、然うすると、雀が多く集つて來て、糟を食べます。其中に雀は醉て了つて、其所に豐寢をする。また其中に柿の葉が天日に干れて、段々捲縮ん

ながら、雀をぐる〳〵包んで了ふ。其所を籍ではけば、所謂一擧にして、雀一斗も捕れるといふものぢや。』

其七十　大釜

近頃方々に盜賊が入るといふので、何家でも戸締りを嚴重にして居るが、唯一軒平氣で居る家がありました。何故かと聞て見ると、其家には盜まれるやうな物は、何も無いから安心だといふのであつた。けれど、其家に、大きな釜が一個あつて、それを盜まれては困ると、主人、は夜になると、其釜の中に入つて寢る事にきめて居たすると一夜、二三人の盜賊が、他所は締り嚴重で入れぬ所から、せめては此貧乏家の釜でも盜まうてはないかと評議一決、人目を忍むで、首尾よく其大釜を盜み出した。さて釜の中には、例の主人が、宵から這入て、眠つて居るとは、賊は少しも知らないから、エッサ〳〵と昇いで、段々淋しい野原に持て行くと、グッスリ寢込んで居た主人は、フト目を醒し、自分は盜賊に釜と共に昇がれて居るとは心づかず、搖れるのは地震でもあるかと心得、大きな聲で、『やアなか〳〵大地震だ〳〵。』と吐鳴たから、驚いたのは盜賊、折角昇いて來た釜は、其儘其所に打捨つてれいて、何方ともなく逃て了つた。釜の中の主人も、また變に思つて、蓋を取て仰いで見ると、青空に星がキラ〳〵と輝いて居るので、始めて氣がついた如に、『はゝア、盜賊め、此釜を置いて、家を昇いで往きやアがつた。』

其七十一　書家

字を書く事が上手で、自ら書家と許して居る人がありました。一日友人が訪ねて來て、談偶ま書の事に及び、『當世書家の中では、誰が一番上手だらうか？』と云ふと、自稱先生、口を開いて、『左横、先づ、何の誰でしやうな。』と指を折つて數へ出したから、友人が、『ては其次は貴下でしやう、何うですか？』と云ふと、自稱先生、『否や、當りませんな。』と答へるから、謙遜したのかと思つたら、何ぞ計らむ、指は既に屈して居たのであつた。

其七十二　書家

ある所に書家が居りました。友人が訪ねて來て、『一ツ鷺の畫をかいて貰ひたい。』と頼むだので、其場で早速、鷺の飛んで居る處を畫いてやつた。その後數日經つて、又友人が來て、舟遊びを勧めたから、俱に或入江に舟を浮べて、面白く遊んで居ると、葦の葉茂つた汀から、一羽の鷺が飛び出した。すると、有繋は畫家、『恰て畫中のものだね。』と氣取ると、友人が、『畫中のものといへば、那鷺の飛てる鹽梅は、日外畫て貰つたのにソツクリだ。那畫が恰て寫眞のやうだ。』と稱賛た。すると、畫家は鼻蠢かして、『何有、那飛んでる鷺は、未だ眞の趣を知らない。』

其七十三　馬と牛

ある家に、客が二三人集つて、獣の話を始めました。其中の一人が、『何でも獣の中で、蹄の蹴たものは善く奔るし、蹴て居らぬものは歩くのが遲い。』と云つた所が、他の一人が、『否や、其麼事はない。馬は蹄が蹴て居らないが、迅く走るし、牛は蹴て居つても遲いではないか。』といふ。成程此人の云方が道理だと思つて居ると、乃て前の人の云ふ事が面白い。曰く、『さやう、馬が若蹄が蹴て居るなら、それこそ一跳千里だらう。又牛が若蹄が蹴て居なかつたなら、それこそ歩けぬだらう。』

其七十四　釣好き

釣道樂の人が二三人て、さる濱邊で、競爭て魚釣をして居りました。ある人が、其傍に見て居たが、『貴下、何匹釣れました？』と嗤くと、『はい、今餌をねらつて居るのとも合せて二匹きです。』

其七十五　達磨

物識顔する人があつて、何事ても不可解ことがあつたなら、凡て解決を與へてやると威張つて居るので、ある男が訪ねて往て、『先生、那達磨の書を能く拜見しますが、何處のも足を畫きませぬが、何ういふ理由でしやう？』と問くと、先生のいふには、『あれはその、達磨太子と云れた方は、九年の間、坐禪をくむだ儘て、行を積れたものだから、腰から下が腐爛て了つたのだ。それだによつて、足は無いのだ。』乃て男は、成程と感心し、『よく解りました。てすが、尙一

つ伺ひたい事があります。』といふ。先生、『それは甚麽事か？』と反問すので、『實は其足のないのは能く解りましたが、那達磨の耳に、環をかいてあるのは、那ア何ういふわけでしやう？』と問かれ、先生一寸思案の體であつたが、『汝那が解らぬのか。あれは、既に足が無くて歩く事が能ぬから、居所を換る時に、兩手で捉へる鈕にするのだ。』

其七十六　火之用心

木枯吹き荒む冬の夜も、深々と更けゆく頃、霜柱踏みしめ〳〵、『火の用心〳〵。』と呼はりながら、火の番が廻つて居たが、但ある家の前まで來ると、未だ寢ずに居るものと見ね、燈火がカン〳〵と

點つて居て、人の話聲さて聞へるから、『火の用心をして下さいよ。』と特に注意すると、『いや何うも御苦勞樣。』と内から聲あつて『火の番さん、寒いから、一杯お遣んなさい。』と招ぜられ、入つて見ると、好物の酒宴。火之番慾も德も無くなつて、酒の馳走になり、充分煽つた後、思出したやうに、其場を辭したが、去るに臨むで、『何うか火の用心を願ひますよ。』けれども其爛德利の下は、何うか御勝手に。』

其七十七　化物退治

ある村端れに、入道の化物が出て、人を惱すといふ評判があります。それは、首の長い入道で、何でも、往く人の背後から、人の頭を越して、前に、倒さまに、怖い顏を出して、ニヤツと笑ふので、

之に出遭たものは、皆氣絶する。といふ事。て、村の若者が寄集つて、此退治法を協議に及ぶと、一人の若者が良法を案出したといふから、聞いて見ると、『杖五六本と、鋏と、麻索とがあれば可い』といふ。『では、其をもつて何うするか。』といへば、『先づ、笠を被つて出掛けて往くのだ。すると、入道め、首を長くして、段々倒さに垂れやうとするから、其時此方では、笠をソッと、杖の頭につけ、徐々上に指上げてゆくのさ。さうすると、入道は、段々首を長くする。此方でも、段々杖を繋いで、高く〳〵指しあげる中に、終ひには、入道の頭が糸のやうに、細くなるに違ひないから、其時用意の鋏を出して、チョキンと、其頭を斷れば、何の雜作もない事だ。』

其七十八　甲冑姿

昔は弓矢を把つて、一角の大達者であつた人、今は零落て、其日の生活さへ立兼る者がありました。けれども、代々傳つた一組の甲冑だけは、何うしても失す事は能ぬと云て、大切に藏つてれいた所が、最早時候も寒空になつて來るのに、單物一枚で、何うする事も能ず、毎日慄へてる始末だから、遂に堪らずなつて、止むなく、其甲冑を出して着たので、漸く寒さだけは凌ぐ事が能た。すると、獨身者の悲しさ、臺所の事も自ら爲なければならぬので、それには當惑したが、偖よ何うなるものかと、其甲冑姿のまゝ、手桶をさげて、井戸端への出馬、といふ奇態を演じた。すると、折も折とて、これ

も同じ長屋に獨住の男、たゞ違うのは生活に困らぬ暢氣者、今時に類と眞似のない甲冑姿を視て驚いたが、其處は氣轉者、『將軍！、これより何處へ參らるゝな。』と問へば、『否や、何處へも參らぬが、これを裘衣とすれば、家を濟める事が能きやう。』

其七十九　富者

近所で評判の富豪家の主人、一日多くの供を伴て、橋の上を通ると、恰度橋下に憩ふて居た乞食の一群が、之を視て、『那人は、それ名高い富豪家だ。』『さうだ。名高い富豪家だが、財產は何の位あるだらう？』と噂とり〳〵。すると、其中での物識が『さうさ、十萬圓以上だといふ事だ。』と云へば他の仲間が、『否や其麼には無い。』といふ。乃て物識が、『汝何うして知てる？』と聞くと、『那の人には限らぬが、何でも、內輪は外見ほどには往かぬものだよ。』との返答。て、又、『さうばかりも往かぬが……。』といへば、仲間は得意顏して、『否やさうてはない。先達て質屋の爺が、俺を見て、那の身體に居る虱は、恐くは一升を下るまい、といふのを聞いたから、後て、俺が試しに、虱狩をして試たところ、三合は無かつた位だもの。』

其八十　雁

肉食して少しも構はぬ僧がありました。處が其事を知た人が、此生臭坊主を相手に、一ッ金儲けをしてやらうと思ひ立ち、一日坊主を訪ねて、私に、『和尙さん、雁の賣物て、安いのがあるから、一羽

買て下さいませぬか。』と話かけると、固より好物の事とて、和尚は口車に乗せられ、『内々て買はう。』といふ事になり、何程々々と値段を定め、其代金を渡すと、男は後から、一羽の雀を出した。和尚は驚いて、『これは、雁だと思ひの外、雀ではないか。』と苦情を言かけると、男は茲ぞと、大聲揚げて、『何だと、此和尚、これが雁て無いとは何處をもつて云ふのだ？。』と吐鳴り立たので、元々内密肉食する和尚の事とて、事荒立てられては大變と、低い聲して、『何卒默つて下さい、これて結搆。』と苦笑ひ。

其八十一　鶏軍の一鶴

ある村て資産家の主人、毎日々々爲す事もなく遊び暮して居りましたが、何か面白い思付はないかと考へた末、此村中て、自分を除いた外には、誰が一番物識てあるかを、試してやらうと、ある日、それとはなしに、村の者を招いて、御馳走をする事にした。而して床の間に、わざと六ッかしい詩を書いた軸をかけてれいて、誰がこれを讀むか知ら、と見て居た。すると、招れて集つて來た者は、皆れ世辭たら〳〵に、此家の物を褒め稱やして、主人の機嫌を取り、果は、目に一丁字無き者等の事とて、其軸を見て、何と心得たか、各自に珠數を爪繰り、難有さうに拜謝した。主人は心中、『此麼詩を書たものが、何處が難有くて拜むのだらう。皆な字が讀めぬから此態なのだ。』と可笑くて堪らない。其中に、後ればせに、其處へ來た一人の老爺、同じやうに、皆なの眞似をして、床の間の前まて來た

が、これば、かりは、珠數も出さず、唯觀たばかりで退いたから、お人は、茲に始めて、其人ありと云はぬばかりに、其老爺に向つて、

『いや貴老さんは、實に鷄軍の一鶴ぢや。』と褒めると、老爺は面喰ひ、『何故、さう私ばかりをれ褒め下さる？。それでは却て困ります。』と云へば、主人、『否や、左程までお隱しあるな。實は此軸、眞にれ讀みなされたは貴老ばかり、見かけによらぬ博識の段、誠に感服致した。』と益す褒め立てるので、何の事だが譯が解らず、老爺は愈よ逡巡しつゝ、『實は申譯もございませぬ。拙者は珠數を忘れて來ました爲に。ツイ拜む事が能ませぬ。』

其八十二　同衾

ある家に、友人が遠方から遊びに來たので、主人は大喜びて、種々と歎待うとするが、何分にも、家貧しきため、心意に叶ふ事も能きず、殊に夜分になつて、夜具に困却つた。詮方無いから、友人に辯疎をして、二人一夜具に同衾する事にした。其夜は非常に寒い晩であつたが、右樣の仲であるから、互に讓り合ひ、自分は寒い目をしても、友人には成るべく寒くないやうにと、主人は客の方に夜具を押やり、客は又主人の方に押やつて居る中に、二人とも熟眠て了つた。斯て夜半になると、寒い夜の一入寒さを增して來た處から、二人は堪へ兼て、夢ともなく現ともなく、先客の方て、充分夜具を被つて了ふと、今度は主人の方で、それを取褫つて、自分だけが充分に被る。すると又客の方、かと思ふと主人の方と、いふやうに、

取たりやつたり、遣たり取たりする樣になつた。正氣であつたなら、謡り合程の仲であるから、此麽事も爲まいけれど、眠つて居る事と、自分は知らずに爲るので。斯くして居る中に、双方共寒いのと疲れたのとで、客が先づ目を覺し、夜具から出て、坐つて居ると、主人も目を覺し、驚いて、『君、何うして眠らぬのだ。』と尋ねると、客の曰く、『いや、何だか、非常に力疲れたから、一休みして居るのさ。』

其八十三　一目

ある物識顔する男が、『人が物を視るのに、片々の一目あれば足りるものだ。』と云ふと、少し智惠の足ない小僧が、『それでも目は二ッあるてはないか。』と反問すので、『それはさうさ。けれども二ッあるのは、若もの事があつて、片々を失すやうな事があつたとき、其かけがひの用心にしてあるのだ。』と得意て云ふ。すると、小僧は『成程。』と感心して、『ては、若や甚麽怪我て、潰すまいものでもないから、片々を閉藏て置かう。』と、嚴重に繃帶して、平常も一方ばかりて視て居た。所が、此小僧生來亂暴のため、ある時誤つて目を潰して了つた。乃で、『成程、此麽災難があるのだから、前の云事を聽て置いて可かつた。』と、他年の間、閉藏つて置た方の繃帶を外すと、見ゐる事は確かだけれど、右と左て、見當が違うので、家の者等や視て、『おや、汝さん達は何處から來た。』

其八十四　放蕩者

一、青年がありましたが、何時しか花柳の巷に彷徨した揚句、放蕩無頼の者となつて、得たものは借財ばかり、首も廻らぬ始末となつたゝめ、たゞ所謂、陽臺路隔、鵲橋無由渡。徒斷腸於巫山雲耳。といふ身の上になつたが、未だ迷夢は醒めず、一向愛妓の顏を見たいとばかり思つて居る。て、往昔漢の武帝は、返魂香を焚て、煙中に李夫人を致した。といふ事を思ひ浮べ、自分も一つさうして愛妓の顏を見やうと、即ち日頃愛妓から來た所の情書を燒いた所が、案の掟、あり〳〵と姿が煙の中に現はれた。乃て、大に喜んで、今や物言んとして、フト見れば、燒いたのが情書でなくて、間違へて諸

處方々の責冊であつたゝめ、現はれた姿までが、何れも情を强て我を望む所の、怖ろしき顏した借金取。

其八十五　大根

ある所に、素敵に大きな大根が出來て、其中でも、最も大きいのは、長さ一丈餘もある。といふ話をして居るのを、傍に聞いて居か男、『何とかして、其大根が欲いものだ。』といふから、『汝、其麼ものを、何うする積だ。』と聞くと、男は、『さればさ、俺の家には、井戸が無くて不自由して居るから、其大根を培養つて、可い時分に拔くと、其痕跡が自然と井戸になるだらうと思つてさ、』

其八十六　燈油注

非常に何事にも細かしい主人がありました。一日、新しく一人の小僧を傭入たので、先づ第一に、燈油の注し方を敎へるのに、『燈油は何でも、これを注した後で、其燈油注の口を、擦つて置かねと、必ず油が滴つて、汚れもするし、油も損になる。これを氣をつけねと不可ぬ。』と敎へた。所が、『ハイ。』と返辭をしてゐながら、小僧は忘れて、一夕、燈油を注いだ後、擦つてゐく事を爲なかつた。果せるかな、油が後て滴つて居たのを、主人が見付け、大に怒ると、小僧は、『此次から、必と忘れませぬから、今度だけれ免し下さい。』と頼み、さて、翌日になると、燈油を注す時、今日は忘れなかつたと見ゐて、其注口を擦つた。一度で止るか知らと、主人が見て居ると、二度三度、四度五度、段々と數限りなく擦つて居るので、主人も變に思つて、『れい、汝は何時までも何をして居るのだ？』と尋ねると、小僧は、『はい、これから先、注ぐ度びの分を、一度に擦つて置くのです。』

其八十七　用意周到

以前はさる高等官を勤めた人が、免官となり、落魄して居りましたが、一日、昔用ゐた大禮服を出して、それを着流し、何か出掛るのを待て居る樣子の處へ、友人が來て、『君は何處かへ出掛るのか？』と尋ねると、『否、別に出掛ると決りはせぬが、實は、隣家に今夜御

祝儀があつて、大分賓客を招ぶ樣子だから……」といふ、友人は、

『成程、賓客が大分集つて居るが、君も招ばれた譯なのだな。』と中てた積りの處、『否や、未だ俺は招ばれぬのだ。』との返辭、『ては、甚だ可笑いてはないか、招ばれもせぬのに……。』と不審ると、『だから、未だ往かぬのだ。』と益す平氣。友人は、愈よ可笑さに堪ねず、『其麼ら、何故、大禮服なんか着て待て居るのだ？。緣故が無いのに、招びは爲ないのだよ。』と笑へば、主人は、『招ばなければ、往かぬまての事さ。招ばれた時の用心だ。』

其八十八　忠臣

ある時、疫病神が集つて評議を凝しました、其評議々案といふのは、近頃は可い鹽梅に、時候が惡いから、此際大に精出して、疫病を流行らせる方法を取らなければならぬ、其方法は奈何するか？といふのであつた。て、先づ其流行を擴めるために、議長から、其中て、最も强い者を、指名した處が、これも其中て、屈强の疫病神、一策を考へたとあつて、其云ふ所に因ると、『從來の例に徵ると、人間が疫病に罹ると、直に、那の巫子といふ者が立つて、れ符を授けたりして、兎角巫子が邪魔をするから、先第一番に、此巫子を疫病に罹らして、死なせなければ、到底充分に流行させる事が能きない。』と申立た。處が、又別に策ありといふものがあつて、それは、『今日の文明の世の中ては、巫子などを信ずるものは、至て尠くなつて來たから、此巫子位を殺して見た處て、到底吾々の希望を滿足さする

譯には往かぬ、夫よりか、今日は彼の藪醫者が澤山有て、直に人間は之にかゝるから、先此醫者を疫病に罹けて殺さなければ、何うする事もならぬ。』といふ意見であつた。此二策は何れも有力なるものであつたが、結局如何なる判斷が議長から出るかと見れば、議長の曰く、『否や何れも下策ぢや。考へても見よ、彼藪醫者の如きは我輩の殺すことが能きぬ者を、渠は却て之を殺すではないか。して見ると、渠は實に、我輩の忠臣とも云ふべき者ぢや。』

其八十九　下を御覽

ある所で、屋根やが屋根を葺いて居ると其下に、足駄の歯入屋が來て、瀬に仕事をして居たが、フト屋根の上を仰いで、『商賣とは云ながら、何故斯も違ふものだらう。那麼高い處で、屋根やさんが奇麗な仕事をして居るのに、俺は地べタで、此麼汚い仕事をして居るのだ。屋根やさんが羨しい。』と云へば、屋根やが之を聞いて、『歯入屋さん、其麼に嘆くものではない、未だ汝の下にも、商賣があるよ。』といふから、『へえー、それは何でしやう？』と聞けば、屋根やが、『そち那處に往て下を御覽、井戸堀が居る。』

其九十　鐘聲の數

ある片田舎に、古い寺がありました。此寺で平常撞く鐘を、村の者は當にして、時刻を知る事になつて居た所が、今度新に來た寺の小僧、九時を報知せるために、九ツ撞くのを、誤つて十一撞いたか

ら、村の者は驚く、住職は怒る。大變な騒ぎになつて、小僧を呼付けて、住職から、『何故汝は九ツ撞く所を、十一も撞いて番狂はせしたのか？。せめては一つ撞き誤つて、十とても云ふなら兎に角、二つも違ふとは言語同斷ぢや。』と嚴しく叱ると、小僧は、『實は一ツ間違つて、十撞いたものですから、駭いて撞木で止めやうとしたら、十一鳴たのです。』と答へたので、此上怒る事も能ず、其儘沙汰止み。

其九十一　夜明け

酒癖の人がありました。妻君が非常に心配して、『所夫は酒の爲に生命を捨るやうな事が出來るから、酒は斷然れ廢めなさい。』と度々異見するので、『然らば、今日以後、必ず禁酒する。』と誓つて、成程夫からといふもの、酒を飲まずに居たが、ある冬の、非常に寒い晩になると、急に酒が飲みたくて堪らない。けれども一旦誓つた妻君の手前、何とも云ふ事が能きず、其儘凝乎と堪へて、寐て見たが、寒くて寐られない。止むなく頭から頭巾を被つて、漸との事で眠つたが、一眠りして目が覺めると、又何うしても酒が飲みたくて堪らない。密と首を擡げて見ると、早や燈火は消えて暗いし、家の者等も寐靜つたと見えて、聲も聞えぬ。これ、そ幸ひ、内々で酒を飲んでやらうと、密かに寐床を這出て、忍び足に臺所の方に往くと、忽ち家の者等が、此樣子を見て、ドッと笑ひ出したので、自分は頭巾を被つて居る事を忘れ、驚き周章て、『オヤッ、厨下は既う夜が明けたのか。』

其九十二　章魚藥師

ある時、種々の佛が集つて、宴會を開く事になりました。追々方々から集り來つて、愈よ席定まる段になると、何處からとなく、灸物の臭がして來た。此灸物の臭は、佛に禁物であるから、皆なが騒ぎ出した、其處等此處等を探し、詮義をして居ると、或者が大聲あげて云ふには、『分明つた〳〵、那處に章魚藥師が、圍爐裡の火に藥つて居るのだ。』

其九十三　母の恩

ある神社の在る處に、漸く身體を入れる位の洞孔がありました。

そして、此洞孔を無事に脱けて通れば、金儲が出來ると言傳へて、平常此洞孔に人が寄つて居る有樣。すると、茲に或親不幸者があつて、昨一人の母親を置去にして、家を飛出し、無頼仲間に交はつて居たが、近頃非常に貧窮する所から、元より眞正の思慮も起さず、一ツ例の洞孔を脱て、何か福を授けて貰はうと、其所へ出掛て、早速洞孔へ入つて見た。處が此孔は普通の人の身體が漸と位なのに此者の身體は、二人前もありさうに肥え太つて居るために、なかなか工合よく遣入らない。それでも、唯もう金が欲い一點張から、無理に遣入た處、半ばにして、身體が前へも後へも動かなくなつた。

此男、これは堪らぬと、悶き出すと、悶けば悶く程動けなくなつて、果は悲しくなつて、遂に『救けて呉れ！』と叫び出した。乃

て多くの人々が手傳ひ、無理に其身體を押込めて、後辛との事て引出して見ると、男は眞青になつて、恰て死人のやう。口もきかず、只涙をはら〳〵と流して居たが、少時してから、云ふには、『呼、實に苦しかつた、自分の苦しかつたにつけて、俺は始て親が、此麼身體にして呉れた苦勞を思ひ遣つた。而して、同時に、俺には母親のある事を思ひ出しました。』

其九十四　彌勒の味

ある田舍者、京都遊覽に出かけて、八坂に往くと、其處に掛茶屋があるから、それに憩んて塔を見て居た。すると茶屋の姥が茶を汲むて出したから、それを飲みながら、フト見ると、店に面白い形した、饅頭が出してある。田舍者が、『那れは何だ。』と聞くと、姥は塔の事を尋ねたのだと心得、『那れは名高い八坂の塔てす。』といふ。乃て、田舍者は一ッ買て、之を食べながら、又、『中にあるのは何だ？』と尋ねると、今度は姥が、『彌勒佛てす。』と答へる。すると田舍者は、『はゝア、さうてすか。してみると、塔の味は彌勒より不甘美。』

其九十五　一發千矢

ある村に一人の先生があつた。一日村の若者が、一本を携へて先生の處へ往き、『此本に、千手觀音現はれ、毎手に弓矢を執り、一發千矢、衆其鏃を避る能はず。とありますが、私の考へては、元來弓を射るには、左手に弓を執り、右手て矢を放つのだから、千本の手

なら、一時に五百の矢ほか射られぬ譯と思ひます。それを千本の手て、千本の矢を放つたとあるは、間違ひてはありませぬか？』と質問に及むだ。先生も、成程と心得、一寸當惑したが、良あつて、『一寸其本を見せなさい。』と、男の持て來た本を受取つて、讀むて居たが、聽て、『何有、俺が讀むと、汝の云ふ樣に、意味は取れない、』と云はれたので、男は不審に思つて、『何うして？』と問くと、先生の曰く。『汝等は、能く本を讀まぬから不可ん。それ寛なさい、其上に怪い哉とあるてはないか。若し千本の手て五百の矢を放つのなら、それは當然だから、少しも怪しむに足らぬのだ。』

其九十六　盜術の演習

ある所に富者がありましたが、人の運は分明らぬものて、此人一朝利を失ひ、忽ちの間に、さしもの家產を蕩盡して了つた。けれど幸ひにして、田舍に少しばかりの家屋敷が殘してあつたゝめ、それに引移つて、暫く爲す事もなく籠居する事になつた。すると、今までチャホヤ云つて、出入した者も、影さへ見せぬ淋しさに、所謂門前雀羅を張るといふ有樣。斯る處へ、一友人が訪ねて來たので、主人の喜悅一方ならず、『貧賤になつたゝめ、誰一人訪ねて呉れる者も無いのに、能く忘れずに來て呉れた。』と、涙を流して、能きるだけの欵待をして、四方八方の話をして居ると、生憎、此日に限つて、親戚に大病人が出來たから、直ぐ主人に來て貰ひたいと、使が招びに來た。主人は止むなく、『それては往て來るから、氣の毒だが、留

守をして居て呉れ。』と友人に頼むで置いて、主人は出て往た。乃で晩になつて、友人が獨りて留守して居ると、又生憎、强盗が遁入て來て、友人を縛り上げ、其處らにあるもの一品も殘さず、盗み去て了つたので、友人は實に歯痒く思つたけれど、致方なく、夜の明けるを待て居た。間もなく翌日になると、主人が早く歸つて來て、『實に昨夜は相濟なかつた。』と先辨疎をするので、友人は周章て之を遮り、『なに、濟まぬのは此方の事だ。』と、それから强盗の遁入た事を詳しく話しをして、一向謝罪ると、主人は平氣なもので『何有、決して妨ない。』と云ふから、これは意外！、『そりや又何故か？』と問ねると、主人は、『あれは、隣の人が、盗術の演習をして居るのぢや。』

其九十七　蓮根

ある家に客が來て、『近頃の僧侶は、皆濟度すべからざる生臭坊主ばかりだ。』と云ふから、主人が『何故？』と問くと、『だつて、一人として酒を飲み肉を食べぬ者はないからさ。』と云ふ。所が主人は、首を掉て、『否や、未だ其よりか非道いのがあるよ。』と云ふので、今度は客の方から、『それは甚麽事をする和尚か？』と問ねると、『ある寺に往た處が、蓮根を食べてる和尚があつた。』との答へ、『けれども、蓮根は敢て清規に妨ない筈だが……。』と客が再び問ねると、主人の曰く、『否や然うてはない。蓮は佛の座てあるのに、其根を食るに至つては、牀を土足て蹴るやうなもの、佛を蔑むこと、是より甚

い事はない。』

其九十八　小言

ある家の小兒は、なか〳〵惡戯者で、平常烟花を持て遊んで居るので、甚だ危險でならない。てそれを見つける度に、父親が小言を云ふけれども、一向聽容れなかつた。一日相變らず、例の烟花を持て居たから、呼付けて、『烟花は危險いから、持て居てはならぬと いふのに……。』と、嚴しく叱ると、小兒は、『これは先刻拾つたのです。』と言ぬける。嘘て父は、『どれ、れ父さんに見せな。』と言つて、取上げて見て居たが、『れ父さんの小兒の時には、これよりも善い烟花を拾つた事がある。』

其九十九　狸の腹皷

ある所に狸が居て、瀕りに腹皷を打つのが上手て、大に持囃されて居ると、同じ化役の狐が、常に之を嫉み、『此狸さへ居なければ、こ天下は俺のものだに、忌々しきは狸の爺、何とかして亡者にしてやらう。』と、宜からぬ企を起し、一日狸に、『是非充分腹皷を打て貰ひたい、其代りには、俺が美人に化けて、酒のれ酌をして饗應ふから……。』と眞實しやかに頼むと、狸は、狐に其麼企謀があらうとは知らぬから、『今日は、最早方々に招ばれて、大分腹皷を打つたゝめ、疲勞れては居るが、他の者の事てはなし、足下の頼みだから、奮發してやらう。』と云つて、腹皷を打ち出した。すると狐は得たりとし

自分は早速美人に化けて、切りに酒を飲せながら、賞め稱すと、狸は一生懸命になり、我を忘れて興に入り、腹鼓を打つて居たが、しもの腹の皮も、毎日々々打ち續けだから堪らない、運惡く破裂れて、中から臓腑が溢れ出し、狸は其儘死むて了つた。乃て、狐は元の姿に返り、『これで可し〳〵。』

其百　馬の目

ある深山の中で、種々の動物が、各自に特製の食物を持寄て、一場の談話會を開いた。何しろ種々雜多の動物であるから、從つて色々の珍奇しい品物が山の樣に集つたが、其中でも、餘程變つて居たのは、狐の持て來た饅頭であつた。所が、これに早くも目を着けたのは犬で、日頃狐との仲は良くない處から、『或は此奴、吾々仲間を騙すのではないか。』と思はれたので、切りに狐に向つて、其饅頭の詮義立てをした。すると狐は、わざと平氣な顏して、『さう俺の物ばかり詮義しなくても可いではないか、此饅頭は、確かに俺が作へて來たのだから、例に一ッ食べて見給へ、味は自慢の積なんだ。』と述立てる。それても、犬は、なか〳〵油斷がならぬと、凝乎と視ながら、其臭をかいて居たが、これも最前から怪しいと思つて、熟視て居た馬が、『此狐の野郎め、他の者はいざ知らず、俺の目までもぬかうと思つても、左樣は往かぬ、其饅頭は、吾輩の糞だ。』

其百〇一　水桶

富者がありました。處が此人は、性質甚だ苛酷の者であつたゝめ多くの傭人中、一月と辛棒する者がない。今日も亦一人、新參の傭人が出來たので、恰度其頃は夏の事、先づ庭に水を撒けと命ずると傭人は、早速水桶に水を提げて來て、庭中に撒いて居たが、何うした拍子か、持て居た水桶を顚覆したので、之を凝乎と視て居た主人は、忽ち烈火の如く憤つて、『汝の如き奴は役に立ぬ、』と、直樣保證人を呼びに遣り、『此廢男を周旋する汝も汝だ、早速にれ斷りするから、もつと氣の利いた男を寄越せ。』と保證人にまで不足を云つたので、何事かと來て見た保證人は、從來何人となく周旋しても、其甲斐無い上に、此廢事を云はれたので、自分も面白からず感じたから『だつて、其は貴下の方が些無理てはありませぬか。高が誤つて水桶を顚覆した位て、さう、怒りなさらんでも……。それも桶を毀したとか、又大切な植木を臺なしに爲たとか云ふなら、致方もないですが、此位の落度を楯に、奉公人を斷つた日には、迚も永く御厄介になる者はありません、』と云た處、主人は、益す怒つて、『否、何うしても其廢傭人は俺は嫌だ。』と云て肯かぬから、保證人も早默つて居ると、主人が又、『これが庭の中て、水桶だから其儘て濟むやうなものゝ、一朝、それが十二月の末て、客座敷の眞中に、油をこぼしたのてあつたら、何うする積だ？』

其百〇二　章魚と海鰻

章魚が或時、何處からか綿屑を拾つて來た。すると其事を聞いた

海鰻が、早速章魚の處へ往つて、『其綿屑を俺に呉れ。』と云ふ。章魚は、『何うして〳〵、これは折角俺が拾つて來たのだ。實は、最早寒くなつて來たから、これで足袋を作る積なのだから、與る事はできぬ。』と斷つた。それても海鰻は、自分も欲いから、『けれども汝さんは、足が澤山あるのだから、一々使はなくても可いてはないか、だから俺に呉れ。』と瀕りに頼む。て、章魚が、『其麼に欲がるのは、一體何うする積なのだ？。』と聞いて見ると、海鰻の曰く、『俺はそれを貰つて救火衣にするのだ。』

其四〇三　下戸と上戸

ある所に、下戸と上戸と會つて爭論を始めた。兎角上戸は、酒の勢を假りて、下戸を罵るので、下戸の方が負氣味となる。『何だ野暮、極る。汝は始中終餅ばかり食べて、もたれ通してはないか。夫に引換へ俺なんぞは、毎も浩然の氣を養つて居るから、壽命息災だ。汝は愚圖々々して居ると、餅の爲に生命を奪られて了うぞ。吁、口て餅と云ふのさへ汚はしい。』といふのが上戸の口上。茲に於て、下戸は不吉の事を云はれたのだから、口惜くて堪らない。何とかして敵を取て遣りたいものだと、慮へた末、上戸に向つて、『汝は口て餅といふのさへ嫌だと云つたが、今後若し餅と云つたら、何う申譯をする？。』と問ねると、『へム、苦し紛れに何を云ふのだ。俺が此後、口に餅といふ事を云つたなら、其時限り俺は酒を止めて了う。』と言切たので、下戸は此言質を取て置いて、二三日經てから、上戸の家に

往て見ると、相變らずの上機嫌て、『やア又負に來たのだな、可哀相に……。』と云ふ下から、下戸が、『今日は別して勢が可いな。』と、それとなく懸けると、上戸は何心なく、『ウム、今日は滅法可い心もちに醉つた。』

其百〇四　魚賣

所謂江戸ッ子上りの魚屋がありました。毎朝川岸から上つた魚を勢能き聲で賣歩行き、平常繁昌して居た。ある夏の事、兎角魚がわるく成り易いので、一入賣込みに骨が折れて、内心心配しながら、聲高く賣歩行て居ると、但ある長屋の窓から、顔を出して呼止めたものがある。これ幸ひと、魚屋は、何とかして賣付やうとすると、客は能く魚を見て居たが、『魚屋さん、此魚は大分古くなつたやうだね。』と云ふので、しまつたとは思つたが、左あらば躰にて、『だから今の中に、早く買てお食がんなさい。』

其百〇五　電話

ある家の主人が大病て、生命旦夕に迫り、人々眉を顰めて居たが黄昏になつて一層甚くなつて、今にも息を引取り兼まじき氣配となつた。て、ソレッと云ふので、小僧に。『醫者の處へ電話をかけよ。』と命ずると、小僧は周章て電話室に往たが、フト向の電話番號を忘れたから、傍の仲間に、『先方の電話は何處の何番だつた？』と問ねると、聞かれた小僧も狼狽て、『電話をかけて聞けば可い。』

其百〇六　身投

ある長屋に、以前は可なり財産を有て居た人が、一朝零落て、傳ない暮しをして居ると、その昔し、貧に責められ、投身までしやうとした處を、此家の主人に救けられたと云ふ者、今は反對の長者となつて、舊恩を酬ゆるため、此長屋に訪ねて來て、少なからぬ謝禮を贈り、落膽して居る恩人を慰めて歸つたので、思ひ懸なき福が入つたと、喜んで居るのを、壁越しに聞いた隣家の爺、人並だけの智惠がない上に、欲深と來てゐるから堪らない、「はゝア、隣家では旨い事を爲つたわい。俺も一ッ、投身でも救けて、早く福が授かりたいものだ。」と、直に隣家に往つて、其當時の投身を救けた話を聞くと、僅か參圓の金で、人を救けて遣たのが、今百圓の禮を受けたのだとの話に、もう矢も楯も堪らず、早々家へ歸つて、參圓の金をこしらへ、それを懷中にして、何でも投身のありそうな河淵を、那方此方と彷徨て見たが、其樣な人も見當らない。て、有繋の欲深も當惑して居ると、時到も彼此十時過。人足も次第に減じた朧月夜、ある橋の袂に、一人の影が見えたので、若やと思ふて近寄て見ると、未だ年盛りの若者らしいのが、河面を眺めては、サメ〳〵と泣いて居るので、『難有い、これこそ天の惠み、投身覺悟に相違ない。』と、忽ち其處へ駈寄つて、『これ、早まつては不可ぬ。汝は三圓の金に困つて、今身を投げる處なのだらう。止しなさい〳〵。金で命は買へないから、俺が必ず救けて遣る。』と、一生懸命に述べ立てると、若

者は驚いた風情で、『汝さんは、誰に其麼事を云ふのです。』と怪訝顔で、欲深男は、『誰でもない汝さんの事さ、汝さんは投身だらう。』と聞くと、『何だ馬鹿々々しい。私は投身なんぞ爲るものではない。虫歯が痛むて耐らぬから、今戸隱さまへ願を掛けて居る所だ。』との答へ、それても欲深は合點せず、『でも汝さんの袂には、此麼に礫が這入てるてはないか。』と再問くと、『何ホ、これは願を掛る咒ひに使ふ梨の實だ。』

新選笑話集終

不許複製

新選笑話集

正價金貳拾錢

明治三十八年六月二十日印刷
明治三十八年六月廿二日發行

著者　有本松濤

發行者　東京市京橋區新肴町拾四番地　福田滋次郎

印刷者　東京市神田區松下町拾番地　横田五十吉

印刷所　東京市神田區松下町拾番地　横田活版所

發行所　東京市京橋區新肴町拾四番地　晴光館書店

晴光館好評書目

九版
滑稽百笑話
正價三十錢 郵稅四錢

七版
滑稽問答
正價二十錢 郵稅四錢

八版
滑稽百人一首
正價十二錢 郵稅二錢

五版
短篇小說集
正價十八錢 郵稅四錢

近刊
滑稽日本史
正價 郵稅 未定

五版
家庭顧問
正價卅五錢 郵稅六錢

十三版
女醫者
全三冊 各三十錢 郵稅各四錢

八版
日本世界歷史之裏面
正價 各卅五錢 郵稅八錢

廿一版
東京市街全圖
正價十五錢 郵稅二錢

近刊
吾人の記臆
正價 郵稅 未定

特13
321

新選笑話集

国立国会図書館

091766-000-3

特13-321

新選笑話集

有本松涛/著

M38

DBO-0247